【カオ転三次】俺が不幸なのはどう考えてもメシア教が悪い！

ガイヤ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どくいも様の【カオス転生ごちゃまぜサマナー】の三次創作です。近所にやべぇ教会が出来上がってしまった哀れな転生者のお話です。

その場のノリと勢いで書いたので誤字、脱字にはご容赦を。初めての小説なので、文章が読みづらかったらすみません。

感想は全部読んでニコニコさせて貰ってます。投稿の原動力にもなるので、些細な質問や感想でもどしどしお願いします！

目　次

プロローグ ―――― 1
ガイア連合は割と人材が少ない ―――― 9
恐山には白スーツの傷顔ヤクザが出るって本当ですか!? ―――― 18
出しな…テメェの……嫁……シキガミを!とか言ってみたい人生だった ―――― 26
《前編》日本最大の正式な霊的国防組織根願寺（笑） ―――― 34
《後編》五重の塔、世界遺産やめるってよ ―――― 42
《三人称視点・前編》英雄堕ちるは、五重の塔 ―――― 49
《三人称視点・後編》紫音轟くは、英雄の調べ ―――― 64
★異界攻略・情報交換スレ　その６４ ―――― 73
転校生は学園ラブコメ鉄板ネタの一つだよねって話 ―――― 83

プロローグ

世の中には、時に信じられないような出来事が存在する。
告白するくらいには好きだった女の子が、実の兄貴の彼女だった事が判明したり、はたまた、毎日朝起こしにくるツンデレだと思っていた幼馴染が弟の彼女だった事が分かってしまったなんてのもあった。
事実は小説よりも奇なりというが、本当に人生は何があるかわからない。そういう意味でいえば、死んだと思えば、いきなり赤子に転生したなんてことも普通にあり得るわけだ。そう、今の俺のように。

◆◆◆◆◆

俺が新しい生を得て、既に十三年もの月日が流れた。
今世の俺は前世より幸福に生きていた。
糞の塊のような兄貴はいないし、両親は優しい。屑の鏡な弟はいないし、可愛い天使のような妹もいる。転生者として同年代の子供とはあまり仲良くできていないし、割と周りから神童か変なモノが憑いているといった視線で距離を置かれることは多かったが、別に妹がいるので寂しくなんてない。友達０人なんて今時普通のはずだ。
両親は赤子の頃からろくに泣かない気色の悪い俺を愛してくれた。三歳下の妹は「兄ィ、アイス買ってきて」と懐いてくれている。なんだかんだで高スペックな身体能力と転生したのが少し前の時代の日本ということもあって、未来を知っているが故のお年玉運用による株で割と金は稼げているし、将来の安泰はもはや約束されたようなもの筈だった。
俺のそんな今世での経験で得られた少しばかりの自信と自負は、とある出来事を境に崩壊した。
始まりはいつも通りの晩御飯を食べていた時だった。もう少しで中学二年生の夏休みが始まる。それで少しだけ浮き足立ってはいたが、それ以外は特に変わり映えのしないいつもの日常、母の用意してくれた晩御飯のハンバーグを食しながら、付け合わせのミックスベジ

タブルが嫌いな妹から皿に押し付けられていたのを、ついつい甘やかして許してしまう父の姿に笑いが溢れる食卓。
　そんな中、母が新しく近所にできたとある建物について話した。
「ねぇ、あなた。最近まで工事でうるさかった近所のあそこ。新しく教会が出来るみたいよ」
「へぇ、教会が。カトリックかい？」
「それが変なカルト宗教団体らしいのよ」
「それは少し嫌だな。変なことをしない連中だといいが……。なんていう宗教なんだ？」
　カルト宗教団体。日本人なら誰もが少しは嫌気がする存在。俺自身も前世から様々な悪辣な事件を聞いていたこともあってあまり良い印象がない。何の話をしているのかわからないのだろう。一瞬こちらを見て首を傾げた後に目の前のハンバーグに夢中になった妹に微笑ましい気持ちになった俺は、近所にできたというその教会のことが気になった。もし前世での鳥関係宗教のような存在だったなら、妹の安全も考えて今後は近づかない様にしなくてはならない。
　だがそんな俺の考えを蹴散らす、俺にとっての爆弾発言を母はこともなげに話した。
「ええっと、確か、メシア教とかいう団体らしいわよ。何でも人攫いしているだとか、天使を神聖視していて、何も居ない場所に誰かがいるように話しかけている信徒がいたらしいわ。近所のマツコさんが言ってたもの」
「そうか、噂を鵜呑みにするのも危ないが、一応気をつけていた方がいいかもな。ヒデオとアサも気をつけるんだぞ。知らない人について行かないようにな」
「はーい」
「……」
「おーい。聞いてるのかヒデオ？」
「……あっ、うん。わかったよ。俺もうお腹いっぱいだから部屋に戻るね！」
「あら、こんなに残して。もしかして買い食いでもしたのかしらあの

子？」
父と母が何を話しているのか、メシア教？　確かにそんな言葉が聞こえた。殆ど無意識に俺はその場から逃げるように自室へと戻った。
「ほーん、いやいや、まさかね。たしかに転生するなら魔法とかファンタジーには使ってみたいなとは思ってたよ、うん。へえー、でもそっか……」
ベッドに身を投げ出し、息を思い切り吸い込み、枕に顔を埋めて叫んだ。
「ここ、メガテン世界かよおおおおおォォォォォォ!!!」
その日から一週間、俺は今世で初めて仮病を使って学校を休んだ。教会から近所周りの挨拶にイケメンの神父が来た。母親が懐柔された。我が世の地獄の始まりである。

◆◆◆◆◆

女神転生シリーズ。通称メガテン。これらは株式会社アトラスが作り上げたとあるゲームシリーズの名前だ。このゲームの特徴はただ一つ。東京を破壊する。これに尽きる。ゲームシリーズのほぼ全てにおいて世界ないしは東京が破壊される。中には既に東京が世界が滅んでいるところからスタートする作品まである始末だ。
これらのシリーズには悪魔と呼ばれる存在が出てくる。簡単に言えばドラクエのスライムとか、所謂モンスターみたいな奴らだ。最も残虐性はスライムの比ではないが。生きたまま脳みそ啜ったり、恋人の前で女を踊り食いするといえばその酷さがわかるだろう。
そんな糞のような存在の悪魔だが、普通の人には見えないだけでメガテンには割とウヨウヨ存在するのだ。一番弱いやつでもヒグマより強いような化け物がだ。これだけで俺が何故あれほど嘆いていたのかわかるだろう。
そして、【メシア教】。俺の家の近所にできた教会の主。此処が女神転生の世界なら、その名はどんな悪魔よりも警戒すべきものだった。
この組織は女神転生シリーズ、メガテン世界において大きな意味を

持つ。【秩序】、これは人間が生きる上で欠かせないものだ。秩序なき社会に安寧はない。それは誰もが知っている。女神転生シリーズは大体、この秩序を含む、三つの勢力の話が多い。【秩序】、【混沌】、そして【中庸】、この三つだ。それぞれ、法を重んじるか、自由を愛するか、それともどちらも程々がいいか、思想を形にしたものでプレイヤーはそれどれかを選んだルートを進んでいく、それが女神転生というゲームの特徴だった。

その中でメシア教は、ゲーム内においての【秩序】。この属性に属していた。

この属性は。法を重んじて、弱者を救う。施しこそが尊いという、割と文章として書く文には真っ当なものだ。しかし、メシア教はそれが行き過ぎている。過激では収められないほどに。

例を挙げるなら、プレイヤーの親友を洗脳して救世主に仕立て上げて良いように扱ったり、人間の子供だけ攫って、その両親は穢れているとかいって殺し、子供達だけで千年王国作ろうとしたり、メガテンで何か酷いことやっている奴がいたらメシア教徒、メシアンだと思えといわれるくらいにはクソな存在。大体、女神転生では神も天使も悪魔の一種なのに、それを棚に上げて天罰だなんだと好き放題やっている危ない奴ら。

それがメシア教である。

「このまま何もせず、餃子にされるわけにはいかない！」

とにかく行動しなければいけない。俺はすぐに動き出した。

あの衝撃の食卓から早くも一週間、俺がただ放心して無駄に日々を過ごしていたかというとそんな訳がない。この世界が女神転生の世界だというなら、先ずは情報を集めるべきだと行動に移ったのだ。情報を集めるためのツールは父が持っていたパソコンである。そして様々なサイトを歩きわたり調べた結果、ここがメガテン、女神転生の世界だという疑念は確証に変わっていった。

先ず、メシア教について調べた。分かったことは米国はもう駄目だということだ。米国を含むほとんどの主要国家はメシア教が蔓延っていた。更に、ジュネスグループの存在も確認した。うちの近所には

なかったので知らなかったが、この情報によりこの世界にはペルソナもあることを考慮しなければならなくなった。
次に、近所のメシア教会に見学といって偵察に行った。
神父のイケメンは、快く俺を迎え入れた。そこで色々と見て回ったが、奴らのシンボルであるクソ天使は見つからなかった。ただ単に見えていないだけかもしれないけど。
とりあえず、神父から情報を引き出した。何故こんなちんけな町に教会なんか建てたのか、天使の見た目は美少女なのか、此処で何をするのが目的なのか、天使はふたなりって本当ですか等々。神父は、笑顔を絶やさずどんな質問にも答えてくれた。まあ、最後の質問の時は瞳の奥に呆れが見えていたが。
最後に極めつけは、ネットサーフィンで見つけたあまりにも怪しすぎるスレッド。そのスレッド名は【転生者雑談スレ３８】。最初は冗談と思ったが、入る時に入れた前世を知るものしか答えれないようなパスワード、更にはスレッド内で語られる内容。それら全てが、俺以外にも転生者が大量にいたことを証明していた。
嬉しかった。
強がっていたが、転生者というフィルター越しに、常に疎外感と孤独が纏わりついていた俺にも同じ境遇の仲間がいるのだと柄にもなく感動した。会いに行こう、そう思った。過去ログを漁り、【星霊神社】と【ガイア連合山梨支部】の存在を知った俺は、両親と妹を何とか誤魔化して夏休みを利用し、自身の力を覚醒させるために富士山へと向かった。
「君が新しい子だね。僕のことは掲示板内みたいにショタオジとでも呼んでくれていいよ。神社へ案内するからついておいで」
何も無い場所から俺と同じくらい背丈の、陰陽師っぽい服装の少年が現れる。
俺はスレッド内で、星霊神社の管理人、始まりのデビルサマナーが、何故、ショタオジと呼ばれていたのかをそこで知った。
妙にニコニコしたショタオジについていき、大きくて神聖な神社についた俺は、そこで力を得るための修行を行った。

覚醒修行というものらしく、何度も死ぬような疑似体験をして魂を覚醒させるという、荒技を持って霊的資質を呼び起こすもので、スレッド内で散々きついと言われていただけの事はあった。

俺自身、何度もくじけかけた。だが、脳裏を浮かぶ今世の家族と自分の今後を思うと頑張れた。

どうやら俺には才能があったらしい。他の転生者よりも早く修行は終わり、何とか夏休み中に覚醒することができた。覚醒して得た力は【ブフ】。女神転生シリーズでは氷結系に属する魔法だった。そう、魔法だ。

星霊神社の中庭、俺は右手を前に突き出す構えのまま、目を瞑る。思い描くは、身体の中にある少しどろっとした液体を手繰り寄せて手から放つイメージ。瞬間、掌から氷の塊が飛んでいく。それは、眼前の大岩が粉砕して、その周囲を凍りつかせた。

「よし、覚醒修行はこれで終わりだ。お疲れ様」

俺は感動と謎の全能感を味わっていた。そして、ニコニコしたショタオジに呪殺系にも才能があると言われ、ホイホイ乗せられて地獄の修行圧縮バージョンを受けた結果、俺はスタートラインにしては中々の力を手に入れた。ショタオジの簡易アナライズ曰く、

【ステータス】

ブスジマ　ヒデオ《ＬＶ１》

【スキル欄】

・ブフ

・ムド

・トラポート

【耐性】

無効：破魔

耐：　氷結、呪殺

スキル欄でいうならば、俺は今【ブフ】【ムド】そして、【トラポート】が使えるのだ。更には簡易アナライズで調べてもらった俺のステータス傾向は【魔体】型。贅沢をいうなら【魔速】型が良かったが、

それでも魔法スキルを有効活用するには適したステータス傾向だった。掲示板内やショタオジ自身から告げられた【大破壊】という終末への始まりを生き抜くためにはまだまだ力不足だろうが、何とかレベルを上げて、少なくとも、近所にできたメシア教団の魔の手から、家族を守るくらいにはならないといけない。

俺はショタオジに礼を言って、ガイア連合山梨支部へ所属願いを出して故郷へと帰った。全ては愛する家族を守るため。星霊神社へ来る前に抱えていた不安は驚くほど軽くなっていた。力を得た俺はもうあの頃のような無力な存在ではないのだッ！　メシア教、滅ぶべし！

それにしても、何で他に支部もないのにガイア連合山梨支部なんていう名前にしたんだ。安価は絶対というが、本部の名前をガイア連合なんていう曰く付きのものにしたら駄目だろう。というか山梨支部って、転生者以外の人にじゃあ本部はどこですかと聞かれた時、どう答えればいいんだ。山梨支部なんですけど本部なんですってか。意味わからんわ。

俺は早速、空間転移魔法であるトラポートを使い、家の前に転移しようとしながら、そんなどうでも良いことを考えていた。

◆◆◆◆◆

家に帰ると妹に泣きつかれた。両親から一発ずつ、頬にビンタを食らった。そして思い返した。そういえば、長期の泊まり込みすること言ってなかったな、と。夏休みのほとんどを星霊神社で修行に費やしていたが、家族から見れば、学校で神童と呼ばれるくらいの優等生な子供が、いきなり一週間も学校を休みだし、その後復活したかと思えば、夏休み初日に失踪。確かにこれは心配をかける。

あまりにも焦っていたとはいえ、両親と妹には悪いことをした。その日から一ヶ月、妹のアサちゃんは俺にくっついたままだった。父も仕事を早く終わらせて帰宅するようになったし、母も前以上に俺を気にかけるようになった。

特に妹のアサちゃんは、ご飯の時はもちろん、学校の登下校、休日のお出かけ、果てには風呂や自室に戻ってからも、それはもうべったりと離れなくて、俺は自家発電を一ヶ月近くすることができなくなった。

何故こうなったんだろう。

いや、理由はわかっている。最近学校では、教会で天使のふたなりについて神父と熱く語り合っていたとか、自分の妹に棒状のお菓子を舐めさせて、いやらしい顔で笑っていたとか、やばいシスコン等という噂が流れているのも。そのせいで学校中の女子に避けられ始めているのも。

そう、全ては！

「俺が不幸なのはどう考えてもメシア教が悪い！」

ガイア連合は割と人材が少ない

時間が経つのは早い。

気づけば、俺にとっての転換期であったあの日の食卓から、既に二年が経とうとしていた。

俺もこの二年で身体的にも精神的にも成長した。ガイア連合から支援を受けて異界攻略などを頑張った結果、この前ショタオジにアナライズして貰ったステータスは、

【ステータス】

ブスジマ　ヒデオ《ＬＶ３０》

【スキル欄】

・暴れまくり
・ブフダイン
・マハブフーラ
・ムドオン
・アムリタ
・ディアラマ
・食いしばり
・トラポート
・チャクラウォーク

【耐性】

無効：破魔、呪殺、状態異常
耐：　氷結、物理

ここまで成長していた。ここまで来れば、もうそこらの悪魔は脅威では無くなる。少なくともメシア教の普通の天使【エンジェル】なら者の数ではないといえるだろう。

ここまでくるのにも色々あった。悪魔達との死闘や女子達からの軽蔑の視線、中には罰ゲームの嘘告白なんてのもあった。あれは悪魔達からの死に際の罵倒よりも、よほど心にきたものだ。

早いもので、俺ももう高校生である。

中学では、あのあと最後まで俺の悪評はなくならず、青春とは無縁

の中学校生活となった。彼女もできなかった。ついでにいうと、高校デビューも失敗して現在ぼっち進行中であったりしている。笑えよ、ベジータ。
「うるせぇ！　このM字ハゲがぁ！　何が高校デビューには。自己紹介でのインパクト、第一印象が大切、自分の得意なことや大切なものについて自信満々に話せるようになりましょうだぁ!?　熱く語りすぎて引かれたわ！　もう無理だぁ、俺に青春は来ないんだ！　うわぁぁぁ、俺だって、彼女とか作ってラブラブチュッチュしたいんだよおおおおお!!!!」
「兄ィ、うるさい！」
「ヒデオはいつも朝から元気だな。中学の頃までは、冷静というか、もう少し落ち着いていたんだがなぁ」
「ほら、変なこと言ってないでヒデオも早く朝ごはん食べちゃいなさい。学校遅れるわよ」
　父は会社に遅れると慌てながら家を出て、妹のアサちゃんは寝起きが悪いのか、不機嫌そうに朝ご飯をリスのように口へ詰め込んでいる。とても可愛らしい姿で、そんなアサちゃんを見て、母も俺も少し笑ってしまい、それを見たアサちゃんが怒り出す。
　いつも通りの朝。悪魔やメシア教のことなんて何も知らない、終末なんて夢のまた夢、想像すらできないような平和な朝だ。
　あの日から近所にできたメシア教の教会も、熱心に宗教勧誘してくる以外は特に悪さをすることもなく、裏で起きている霊地活性化という終末への兆し以外は問題はない。このまま大破壊なんて起きなければいいのに、心底そう思う。
【大破壊】。我らがガイア連合の元締め、通称ショタオジが掲示板でこぼした、女神転生シリーズあるあるの一つ。
　大破壊とは文明が滅び、悪魔が蔓延る世界が来る、終末への始まりを示す出来事のことだ。それがどんな風に始まるのかは誰も知らない。核の雨が降ってくるかもしれない。連続した自然災害の成れの果てかもしれない。または、何の前触れもなく大量の悪魔が発生するかもしれない。最後に関しては、霊地活性化の影響で今の地方では馬

鹿にできないレベルで大量発生しているから、一番正解に近いまである。
おかしな話だ。与太話だ。そういう輩は多い。かくいう俺もそうあって欲しいと願っている。しかし、俺を含むガイア連合に所属するほぼ全ての転生者、【大破壊】。すなわち、終末が来ると本気で信じて行動している。
ある者は家族や大切な人を終末から守る為、ある者は自身の命を、ある者はその先の世界で何かをする為。一人一人理由は異なるが、【大破壊を乗り切る】、ガイア連合の目的はそれであった。
何故俺が、たかだかメシア教なんていう一カルト集団を警戒しているのか、その理由もこの大破壊に関連している。
女神転生シリーズ内のシナリオで大破壊を引き起こすような出来事を神の名の下に暗躍して行うのが、メシア教の天使どもなのだ。これだけで名前を見た瞬間警戒した俺の気持ちもわかるだろう。
転生者の中には、女神転生シリーズを知らないが故に奴らの恐ろしさを知らない人たちもいるが、明らかに対応が甘い。女神転生シリーズ愛好者であり、ペルソナ含む全シリーズを遊んだ俺にはわかる。絶対奴らは何かをやらかす。
故に力を手に入れなければならない。たとえ奴等が束になって襲ってきても、大切な家族くらいは守れる力を。その力を得る為に、たとえ学業を犠牲にしても……
「行ってきまーす。ほら、学校行くよ兄ィ」
願わくば、この平和な日常が続きますように。

◆◆◆◆◆

「おい、ブスジマ。お前もう少し頑張れよ。おまっ、全教科赤点はやばいだろ、ええっ？」
「……はい、すみません。あの、このことは家族には」
「いや、これは流石に親御さんにも報告せんといかんと思うぞ。全教科ってのはなぁ」

「すみません、あの、ほんっとにお願いします！　これ以上、妹にゴミを見るような目で無視されたくないんですぅ！　何でもしますから黙っていてください。補習でも何でもしますからぁ!?」
「ええい、鬱陶しい！　わかった、わかったからひっつくな！　でもブスジマ、全教科赤点ってお前単位大丈夫か？　最悪、来年も同じ一年生としてお前を見たくないんだが。まあ、話は終わりだ。帰っていいぞ」
担任のゴリラ、いやサルタニ先生に呆れられながら職員室を出た俺の顔には冷や汗がどっしり溢れて出ていた。
やばい、流石にやばい。学業を疎かにしすぎた。
でも仕方ないだろう。だって忙しいんだもん。決して、どうせ大破壊で終末来たら勉強なんて何の意味もないしなんて考えて、元々頭も良くないので、やる気もない上に注意散漫で授業受けたら、そりゃあ内容が頭に残るわけもないとか、そんな事をいってはいけない。
どうしよう。このままだと最後の期末テストで赤点取って、本当にもう一度一年生を繰り返すかもしれない。そんな事になったら最後、もうアサちゃんは俺のことを兄ィと呼んでくれないかもしれない。ゴミィになるかもしれない。
「……勉強だ。一心不乱の大勉強をやるしかないっ！」
このままでは青春どころの話ではない。俺の兄としての威厳や家庭内地位までもが失われてしまう。大破壊なんて知ったことか。明日より今さ！　取り敢えず、連合に連絡を取って、今来てる依頼を全てキャンセルしてもらおう。

「いや、そんな事いきなり言われても無理ですよ。ブスジマ君にどれだけ名指しで依頼が来てると思ってるんですか。勉強なら私が教えてあげますから、ふざけてないで早くうちに来てください。あと、恐山の巫女の子からもまた依頼来てますよ」
「えっ、あの、でも、最近忙しいし、気分転換的にも休みが欲しいというか……」
「確かにブスジマ君には、いつも大量の依頼をこなしてもらっている

ので助かっていますが、それで忙しくて学業が疎かになっているのは問題ですね。そこに関しては私が勉強を教えるので問題は解決ですね。安心してください、これでも前世は東大だったので勉学には自信があります。高校程度なら教えるのに何の問題もありません」
「いやぁ、しかし、ハセガワさんにそこまで面倒をかけるのは申し訳ないというか、自分の不手際に巻き込むのも躊躇われるみたいな」
「大丈夫です、全然迷惑ではありません。なので良いから早く、いつものように山梨支部へ来てください。それじゃあ待ってますから」
「えっ、ちょっ、まっ!?」
交渉は失敗した。所詮はコミュ障、俺に目上の女性相手の交渉なんて高度な事できるはずもなかったのだ。
諦めて、いつものように支部へ向かうしかない。といっても徒歩や自転車で向かうわけではない。そんな事をすれば1日はかかる。なんせガイア連合山梨支部って街中じゃなくて富士山の中にあるからだ。とてもじゃないが正常な移動手段で学校帰りから向かえる場所ではない。
ならどうするのか。答えは簡単だ。俺にはトラポートという魔法がある。ブフやムド系統のように敵対者を倒す魔法ではない。ドラクエのルーラなんかに近い魔法といえばわかりやすいだろう。この魔法を覚えている事により、俺の過酷なスケジュールは実現されている。
この魔法は、指定場所への時空間転移を可能とするもので、行ったことのある場所なら何処へだろうと、この魔法を使えばほんの一瞬で移動できる。まあ、この魔法を覚えたせいでこき使われているのだが。
視界が一瞬暗くなった後、俺は帰り道にある商店街の路地裏の見慣れた景色から木々が溢れる富士の樹海へと転移した。
何故支部へ直接飛ばないかというと、ショタオジに駄目だと禁止されているのと、支部自体にそういう魔法は対する結界等が展開されているからだ。何でも俺を洗脳して纏まった戦力を支部へいきなりぶち込まれても困るという事だった。あまりにも真っ当すぎる理由に

俺も頷いた。確かにそんな事をされれば大問題になるだろう。たとえ俺より強力な異能者が多数常駐している山梨支部といえど、その中にはまだ覚醒していない転生者の人たちもいるのだ。危険を遠ざけるのは当たり前のことである。

俺は森を少し歩いて、目的の場所へ辿り着いた。

周りの景観をぶち壊すように建てられた四角い建物。何というか見窄らしいというか、もう少し外観頑張ってくれよ感はあるが、何を隠そう、此処こそが転生者達のアジト、我らが秘密基地。【ガイア連合山梨支部】の姿である。

中に入っていつもの受付へ顔を出す。すると奥の方から先ほどの電話相手《ハセガワ　レイ》さんがやってきた。

黒髪のショートに感情の気薄そうな表情、無表情面といったほうがいいか。あの表情でどばどはキツイ言葉を吐いてくるので、その手の人には人気が高いんだとか。それ以前に顔が整っていて美人という前提があるが。誰だって美人に罵声を浴びせられれば何かしら感じるものである。勿論、俺にその手の趣味はないのでグイグイ押してくるハセガワさんは少し苦手だったりする。

「お待ちしてました、ブスジマ君。それでは早速行きましょう」

おそらくあっちもこんなブサイク相手は面倒臭いなどと思っているに違いない。早いところ仕事を終わらせて、勉強する為の時間を確保しなければ。俺は先導するハセガワさんについていき、いつものように仕事をこなしていく。

俺のガイア連合内での仕事は大きく分けて二つある。

一つは異界探索。

【異界】と呼ばれる、悪魔の出現する隔離空間を探索して、目的を果たす仕事だ。

基本は、他の転生者との協力体制でのレベリングやアイテム回収だけの目的が多く、その次に【異界攻略】という、その異界の主を倒して異界を消滅させるというのがある。これが一番やり甲斐のある依頼で、ボス悪魔の周辺には、その異界にいる強力な悪魔が大量に彷徨いていることが多い為、強敵との戦闘回数が増える。

つまりは、レベリングに向いている。それ以外にも悪魔の落とす【マッカ】と呼ばれる万能貨幣とかその他のアイテムも一段と多くなり、収入が跳ね上がる。小さいところでも攻略すれば、日本円にして三桁万円の報酬が貰えたりする。

おかげで俺の預金通帳は学生とは思えない貯まり具合をしている。多分両親に見せたら泣きながら何か悪いことでもしたのかと問い正されるレベルだ。しかし、普通の異界探索はともかく、異界攻略となると長期になることが多いので、その場合は纏まった休み、ゴールデンウィークや夏休み等を利用してこなしている。

二つ目はアイテム作り。

この仕事が俺の依頼の割合の殆どを占める。というか異界攻略なんて、ガイア連合内でも指折りの強者くらいしか指名なんてこない。異界を攻略するのは、どれだけ小さな異界でもガイア連合内ではＰＴを組むことが殆どだ。

もしも、一人で異界攻略をやり続けている奴がいたとしたら、よっぽどの危険好きか、それともＰＴを作れないくらいの生粋ぼっちのどちらかである。ちなみに俺は後者だ。

話は戻るが、俺の魔力は俺の魔法適正の関係か、氷結系、呪殺系、そして回復系の三つに作用する。その為、宝石等を利用して魔石やストーンといったゲームでお馴染みのアイテムを作っているのだ。

この仕事は魔力を宝石に込めるという、まあ、異能者なら簡単に短時間でもできる為、基本学校帰りなんかでやっているのだが、俺の手先が器用なのか、それとも魔力の質でもいいのか、割とアイテムに関しては連合内でも好評で、こうして名指しでアイテム製作を依頼されることも多い。

だが最近、あまりにも二つ目の仕事に関する依頼が多くて、魔力も手も足りていないのが現実だ。放課後は殆ど支部でアイテムを作っているせいで帰るのが遅くなると言い訳を考えるのが面倒極まりない。高校に入ってから不思議生物研究部とかいう、よくわからない部活に幽霊部員で所属したおかげで誤魔化しが効くようになったが、それでも今回の件で俺には勉学の時間が足りないということがわかっ

たので、この仕事を減らそうと考えたわけだ。まあ失敗したわけだが。
「ブスジマ君、お疲れ様。うん、これでブフーラストーン二十個、マハブフーラストーン十個、ムドオンストーン十個に魔石が五十個。依頼料は口座に振り込んでおきますね」
「は、はい」
疲れた。宝石にただひたすら魔力を込めるこの作業は割と精神的、肉体的にも辛いのだ。まだ異界攻略している方がマシだ。あっちは何だかんだで冒険している感じがして楽しい。
しかしこれで本日の仕事は終わりだ。頑張ったおかげで時間も余裕がある。
早く家に帰ろうと荷物を纏めていると、隣にハセガワさんがやってくる。いきなり女性に近づかれるとドキッとするからやめてほしい。今から近づきますねとか何かワンクッション置いてくれないかなと、悶々としているとハセガワさんは何でもないようにに語った。
「ああ、そういえば言い忘れてたました。恐山の重要霊地の異界攻略、遂にするらしいです。日時は〇〇月〇〇日〇〇時から〇〇月＊＊日＊＊時の間。それでガイア連合内でも有力者には協力を依頼してるって神主が。それで、恐山のイタコさん達からあの巫女の子を通して、名指しでブスジマ君に依頼が来てました。多分、ブスジマ君が恐山周辺の異界を片っ端から攻略したからですね。確か、依頼料たんまり貰ったせいで断れなさそうだからごめん頑張ってと伝えてほしいって神主さんが言ってました」
「えっ、なにそれは……」
その言葉は呑気に帰ろうとした俺をその場に踏み留ませるには十分すぎるものだった。
えっ、何も聞いてないんですけど？　もう決定事項なの、既定路線になっちゃったの？　それにその日って期末テスト前三連休の日じゃん。
ショタオジいいいい！　俺を売りやがったなぁアイツ!?　俺が学校の単位ギリギリなの知っててやりやがった!?

「安心してください。勉強ならこれからテストが終わるまで、毎日私が此処で教えますから。だからこれからも学校終わりには支部へ寄ってくださいね」

隣で無表情にそんな言葉を告げるハセガワさん。

どうしてこうなった。

いや、原因は分かっているのだ。こうなったのも全て、霊地が活性化する理由であろうあの組織のせいだ。俺の学校の成績が地に伏して、一向に上がってくる気配がないのも、女の子にかけらもモテないのも、最近妹が冷たいのも。そう、全ては！

「俺が留年しそうなのはどう考えてもメシア教が悪い！　」

恐山には白スーツの傷顔ヤクザが出るって本当ですか!?

『マハブフ』『マハブフ』『マハブフ』『マハブフーラ』

告げられる呪文によって、辺り一面が凍りつく。

元々そこにあった木々も、花も、大岩さえも、全てが氷雪に呑まれていく。それは異界で暴れる悪魔達も例外ではない。一体、一体が並みの霊能力者や異能者なら鎧袖一触であろう強力な悪魔【レギオン】。それらがほんの一瞬も抵抗が許されず、氷像へと姿を変えられていった。

もはや、その場に残っているのは、凍りついた悪魔達と全てが凍りつく白銀の世界を創り出した黒フードの男、その横に立つ、顔面傷だらけの白スーツのヤクザらしき巨漢と西洋の鎧を身に纏った金髪の女。そして、その後ろに固まる巫女服のイタコ達だけだった。

「神主が大きな異界だから気をつけろとかいっていたが、それほど強力な悪魔も出ないしよ、正直期待はずれもいいとこだぜ、なぁマスター」

「あまり油断するなよ、モードレット。まだ、異界のボスの姿が見えていない。恐らく――――」

「――――来ますよ」

「……そうみたいだな」

一見すれば、もう終わったも同然だった。この異界【恐山】の中枢たるこの場所で大量発生していた悪魔を全て蹴散らし、もはや、敵対者はカケラも存在を確認できない。今更、一体の悪魔が現れたところでこの異能者達をどうにか出来るとは思えない。

同行していた、恐山でも有数の手練れである、とあるイタコはそう楽観視していた。

しかし、その考えは甘く、異変はすぐに起きた。

先ほどまでの凍り付いていた床が、突如現れた地面の下から生えて

きた岩によって砕かれる。氷柱が垂れる天井は、突然氷柱を溶かすドロリと黒い何かが滴り落ちてくる。白く凍りついた木々や悪魔達の氷像は、黒き液体に侵食されるように黒く染まり、腐ってゆく。

そして、異界の中でもひときわ存在感を放っていた白銀の大岩は、その中から這い出てくるナニカによって、爆ぜるように砕け散った。

『……恨めしや。アァ、恨めしや。憎い、憎いイイイイ！　メシアめ！　メシア教めぇ！　よクも我が子らヲ！　幾星霜経とうとモ、この恨みは忘れはせんゾォ！　ミナゴロシダ！　スベテ、ノロイツクシテクレルゥ！』

それは手だった。眼だった。そして巨大な人だった。

頭部にあるべき頭は中央に大量の眼が集合する歪な掌に成り代わり、人間でいうヘソの辺りには頭部と同等かそれ以上の眼が生えしきっている。そしてその眼の全てから、黒い液体がまるで涙のように流れ落ちている。恐らく強い酸性のあるその黒い液体は、飛びっちった床をゴッソリと溶かしていた。

恐山の厳しい修行を乗り越えた歴戦のイタコですら、見た瞬間に正気を失い逃げ出す程の圧倒的な重圧。大量の眼にうつる爛々とした、メシア教への恨み憎しみを孕む、恐ろしき狂気。イタコの祖霊達が憎しみによって変化した異界の主は、狂ったように叫んだ。

そして、その化け物は雄叫びをあげて、黒き液体を撒き散らしながら、他を無視して黒フードの男へと向かっていく。全ては自身を封印し、愛しき我が子らを痛めつけた憎きメシア教を滅ぼす為に。

猛烈な勢いでヒグマの二、三倍はある巨躯を、まるでトラックのようなスピードで男目掛けて突っ込ませる。それに巻き込まれれば非力な人間の身体ではほんの少しの抵抗も許さずに砕け散るだろうそれを、しかし、対峙しているフードの男は何ら気にした様子もなく、ただ一言呟いた。

――ー『ブフダイン』

◆◆◆◆◆

「やべぇよ、やべぇよ。これはやばいってアサちゃん！」
「うるさいよ、兄ィ。そんなに騒いで、一体何がヤベェのよ」
「いや、見てくれよこれ！　この前の期末テストの答案！」
「んっ、貸して。……７０．６５．５８．７１．６２．５３．６６．５５．６５．７３。うへぇ、高校ってこんなにテストあるんだ。まぁ、でも、うん、普通じゃん。何がやばいの？」
「いやいや、赤点一つもないんだよ!?　これって凄くない、やばくないか!?」
「……兄ィ。それはただ単に兄ィの頭がやばいだけだよ。はぁ、こんなのが兄でも妹してあげてるの私ぐらいなもんだよねぇ。……小学校の頃は凄かったのにな、兄ィ」
「えっ、なに？　最後なんか言った、アサちゃん」
「なんでもないよ。バカ兄ィ」
　そんな馬鹿なっ！　赤点が一つもないなんて奇跡だろ！　担任のゴリラ、いやサルタニも涙を浮かべて、ハグしてきたぞ。そのせいで、俺が剛毛男好きのホモとかいう噂が出来てしまったけども。絶対に噂を流したやつは許さない。見つけ次第、三日は下痢が止まらない呪術をかけてやる。
　因みに、殆どの教科で以前から三十点、大きいのでは四十点上げてきたからか、最初は教師陣にカンニングを疑われたりしたけどね。委員長が庇ってくれなかったら追試を受けなければいけなくなっていたので、本当に感謝である。
　感謝といえば、ハセガワさんにもしなければいけない。
　ハセガワさんの勉強の教え方は凄い。凄くサラサラと頭に入ってくるし、何より距離が近くてボディタッチが多いのだ。二ヶ月少しだったが、割と幸せな日々だった。ハセガワさんはおそらく男に対して警戒心が薄いタイプなのだろう。それはそれで心配だ。あの見た目に大学生と来れば、そこらのチャラ男を簡単に騙されたりしそうだもんな。チャラ男、幼馴染、弟。うっ頭が！
「はぁ、それにしても今年ももう終わりかぁ。今年も彼女なんて出来なかったな。俺に甘酸っぱい青春はいつ訪れるのだろうか」

「そんなの無理だよ。兄ィに彼女が出来る可能性よりも、私に理想の彼氏ができる可能性の方が全然高いよ。つまり当分は兄ィに彼女なんて出来ないね。もしかしたら一生かもしれないけど」
「言ったな、それを言ったら戦争だぞアサちゃん！」
「ちょっ、もう、暴れないでよぉ。きゃー♪　シスコンに襲われる！」
　妹のアサちゃんとコタツでじゃれあいながら、今年を振り返る。何だかんだあったが、まあクラス内イベントに殆ど参加できなかったこと以外は概ね満足な一年だった。期末テストも問題なく終わり、最近急に他のアイテム製造俺らが成長してきたのに伴い、俺は普通に冬休みをダラダラと満喫していた。

　そうそう、異界攻略といえば【恐山】。あれは大変だったな。あの後、直接ショタオジに抗議しに行ったけど、あの人の言いくるめ性能が高すぎて、気づけば、俺以外にもちゃんとした連合員が行くから、絶対安心安全大丈夫と丸め込まれて結局参加することになった。
　そして当日やってきた転生者はまさかのヤクザ。それはもう、ひと目見た瞬間、
「あっ、この人カタギじゃないわ」
　とこぼしてしまう程度にはヤクザだった。だって、顔面傷だらけの白スーツの巨漢って、もうスリーアウトでしょう。なまじヤクザじゃなくても、その風貌は何かしらヤバい人だよ！　まあ、実際は見た目に反して、凄く真面目で誠実な人だったけど。というか転生者スレッド内で名を轟かせているガイア連合の幹部、通称【霊視ニキ】その人だったんだけどね。当然背後には、シキガミのモードレットもいました。本当に紙で作ったのかっていうクオリティだったよ、あれは。
　霊視ニキ、本名を《ハナヤマ　カオル》という人を一言で表すなら、【メシア教絶対殺すマン】。これに尽きる。
　元々は海外で暮らす一般人だったハナヤマさんは、悪の組織ショッカー……違った、メシア教に攫われて拷問されたらしい。特徴的なスカーフェイスもその時のもので、その存在がどれだけ酷い拷問をされたのかを物語っている。メシア教に攫われたのも、恐らく、ハナ

ヤマさんの転生者特有の高い霊的資質に目をつけたんだと思う。
ハナヤマさんは、メシア教徒達の監視を誤魔化して、何とか施設から逃げ出したらしい。その時の拷問がショタオジの覚醒修行の代わりになって覚醒したらしく、それで身についた力が、ハナヤマさんの代名詞である【霊視】。ゲーム風にいうなら、アナライズだ。
そんな境遇なのでメシア教が大嫌いらしく、ガイア連合内でも随一のメシア教アンチの過激派となっている。一説によれば、転生者掲示板内にある【ガイア連合対メシア教対策総合雑談スレ】というスレッドを、一人で半分以上消費しているらしい。凄まじい恨みを感じるが、俺も近所にメシア教の拠点が出来ているという身の上なので、全然他人事ではない。
今の段階でも、教会にいる神父がイケメンなせいで、俺の母親を含む近所の奥さん連中は殆ど懐柔されている。神父さんも無駄に爽やかで、人の警戒心をさらりと掻い潜る力が強い。気づけば俺以外の家族は、最初の印象であった変なカルト宗教団体という意識は無くなっていたりする。やめろ、作り過ぎたとかいって肉じゃがを持ってくるな。何ですごく美味いんだよ。顔も良くて、料理も美味いって最強かよ。
とりあえずハナヤマさん達と現地のイタコさん達に挨拶して、それから直ぐに異界攻略に取りかかった。俺の場合、期末テストの関係で時間が押してたからね、しょうがない。駆け足気味に異界を進もうとするが、簡単にはいかなかった。元々、恐山自体が日本三大霊山に数えられるレベルには強力な霊地ということもあって、その最重要霊地である祖霊をメシア達に封印されたその異界は、周辺異界より数段上の悪魔が蔓延る場所だった。
以前の俺なら、絶対に一人では入らないレベル。今回は強力な異能者であるハナヤマさんと、そのシキガミであるモードレットも一緒にいたので問題なかったけど、今の俺でも一人で突っ込んで解決してこい、なんて言われたら断れるだろう。
道中の悪魔はそこまででもなかった。ただ問題だったのが、最後に現れた異界の主、いわゆるボス悪魔のイタコの祖霊達の集合体だっ

た。これが厄介極まりなく、呪殺は反射してくるし、祖霊、幽体である故か物理にも耐性があった。氷結も効きが悪かったし、俺のビルドでは相性は悪いといって差し支えなかった。

勿論、持参した氷結系や呪殺系が通じない悪魔用の各種魔法ストーンを使って応戦したし、霊視ニキやモードレットのサポートのおかげで倒せはした。トドメを刺そうとしたら、イタコさん達に全力で止められたけども。

何でもメシア教への恨み辛みで暴走していただけで、落ち着けば、大人しくなるし、イタコさん達にとっては大切な存在で霊地の管理にも必要なのでやめてくれとの事だった。やっぱりメシア教ってろくでもないな。

話自体はよくわかったのでトドメを刺すのは止めたんだけど、その光景を見たイタコの里の長老が俺を止めようとフルスイングで顔面を強打してきたことは絶対に忘れない。絶対にだ。

「それにしても、まさかあの霊地の封印を解いて異界を浄化させた結果、長老が若返るとは思わなかったな」

そう、何とイタコの里には今現在、若返りの水が存在するのである。【恐山の冷水】と呼ばれるそれは、水の癖にそこいらの回復薬よりもHPを回復できる上、魔力まで少しであるが回復してくれる。

そして、水に適性のある者は本当に若返ってしまうのだ。と言っても、普通なら俺の母親レベルの人が二十台後半くらいのお姉さんに見えるレベルへ若返るくらいだが。

えっ、それでも十分凄いだろうって？　いや、確かにそうなんだけど、イタコの里の長老を見たら、なんかその程度だと、可愛いレベルに見えてくるんだ。あれはもはや年齢詐欺どころの話ではない。ショタオジすら可愛いレベルだよ。もう、ヤベェよとしか言い表せられない。だって、

「どうやったら、齢〇〇〇歳の婆さんが俺の妹よりも小さく見える年齢の子になってんの？」

今の長老は見た目だけならロリコンほいほいなのである。巫女服のじゃ口調ロリとか属性強すぎだからしょうがないね。まあ、中身を

知ったらＳＡＮ値直葬されるという、即死級の罠なのだが。
しかし、あれに言い寄られているショタオジの姿は面白いので大変良い。そのまま末長く一緒に暮らしてほしいですな。ははっ。
そういえば最近、この前の異界攻略で、俺の境遇を知ったからか、熱い握手をされながら、メシア教に何かされたら直ぐに連絡してくれと電話番号とメールアドレスを交換したハナヤマさんからメールが来ていたのを思い出す。
何だったか、確か、「巫女服、おばさん、夜這い、コワイ、タスケテ」という意味のわからない文字の羅列が書かれていたと思う。俺は、よくわからないですが頑張ってくださいと見て見ぬふりをした。あれ以降返信がない。これは喰われたかもわからんね。
俺からしたら贅沢極まりないものだと思うけどね。西洋の金髪美女のシキガミに、巫女服大和撫子美人の群れから言い寄られて男としたら最高の立場なはずだ。俺だって恐山の依頼をよく受けているし、今回だって異界攻略を頑張ったのに、何故か俺の周りには、イタコのお姉様達は一人たりとも寄ってこない。
こんなことがあって良いのか。顔面偏差値ならハナヤマさんのスカーフェイスと比べるならどっこいどっこいくらいだろう!? 俺の何がいけないというのだ。やっぱりあれかな、童貞臭いとかそういう目に見えない何かを感じ取られてしまうのだろうか。
もはや。イタコの里での俺の周りにいる女なんて、イタコの里周辺異界を探索、攻略する際の案内役である、イタコの里の見習い巫女のルリちゃん。後は、妹と同じくらいの年齢の何かと小馬鹿にしてくるガキ共しかいない。
いやいや、女の子いるじゃん。転生者掲示板ではそういってくる人もいるが、案内役のルリちゃんとは世間話くらいしかした事ないし、クソガキ共にいたっては、こっちを煽って遊んでいるだけだ。何が童貞クソ雑魚お兄ちゃんだ。舐めやがって。
最初の頃は俺に話しかけてくれるイタコのお姉様もいたのだが、最近ではそれもない。そういえば、いつ頃からそうなったのだろう。確か、ルリちゃんと一緒に異界探索するようになった時期くらいから

だった気がするような。まあ、それはどうでもいいか。
しかし、このままでは来年も俺に出会いはない。一度神頼みにでも行った方がいいのかもしれない。でも、メガテン世界の神様に何かを願うのは、あまりにも抵抗感がある。それに、俺の場合、内面はそこまで悪くはないと思う（当社比）ので、このブサイクな外面を誤魔化せばワンチャンあるのではないか？
「なぁ、アサちゃん。お兄ちゃん、イメチェンしようと思うんだけど、何処か良い美容院知らない？　外面さえ整えれば、お兄ちゃんモテモテになると思うんだ」
「兄ィ、無駄な努力はやめといた方がいいよ。傷が深くなるだけだから。髪型を変えたくらいで兄ィの非モテオーラは消えないって」
一刀両断であった。
ごめんアサちゃん、もう少し手加減してもらっていい？　言葉のナイフどころか、それもう国宝童子切安綱レベルの切れ味だから！
溜息が出る。どうしてこうなった。もはやモテるのは諦めろというのか。俺だって由緒正しき日本男子だ、男にとって都合の良いハーレムにだって憧れる、ハーレムは土台無理でも彼女の一人くらいは欲しいと思う、普通の男の子なんだ。
いや、原因は分かっているのだ。これも全て、イケメンはモテて、ブサイクは唾を吐き捨てられる、つまりは、俺がお姉様にも、女の子にも、かけらもモテないのは世界が悪い。そんな世界を作った存在が悪い。そしてそんな存在を信仰する、そう、全ては！
「俺がモテないのはどう考えてもメシア教が悪い！」

出しな…テメェの……嫁……シキガミを！とか言ってみたい人生だった

「ブスジマ君、何故使わないんですか？」
「えっ？」
「他の受付の子が言ってました。覚醒した転生者はほぼ全員シキガミを使っていると。何故、ブスジマ君ってシキガミは使わないんですか？」
「ああ、そういう事ですね」
　ガイア連合山梨支部、その中にある【転生者居住区】。支部で働く事務の人達が泊まり込む場所、その一室、ハセガワさんの部屋で勉強を教えてもらっていた俺は、妙に距離が近い彼女に疑問を投げかけられていた。しかし、人の耳元で使わないんですかなんて紛らわしい事を吐息まじりに言わないでほしい。男の子が反応しちゃったらどうするんですか、いやらしいですよ、もう。
【シキガミ】。ハセガワさんの言っているのは、世間一般でいう調伏した鬼を使う式神ではなく、ショタオジの技術提供の元、日夜ガイア連合内で生産されているシキガミの方だろう。
　ガイア連合内でのシキガミとは、スライムや地霊と呼ばれる悪魔としての意識や概念が薄い存在を降ろして、紙で使役しているもののことである。代表例としては、この前の恐山異界攻略で出会った、ハナヤマさんのシキガミ、モードレットがそれである。
　えっ、何処が紙だ、どう見ても鎧着てるだけの金髪美女だろいい加減にしろだって？　うんうん、確かにそうなるよな。俺も初見ではそうなった。だが考えて見てほしい。もし、日がな一日掲示板を見ているようなろくでなしの俺らが、自身のリアル二次元嫁を作れるとなったらどうするかを。答えは、既にみせている。
　元々は、絵心皆無のショタオジが作った一反木綿もどきは、変態技術持ちの匠達により、何ということでしょう、立体的な三次元と二次

元のいいとこ取りをしたような美女を作り上げました。変態の一念、天に通ずというやつだろう。
　因みに、変態技術者共がハッスルした結果、今やガイア連合産のシキガミは並みの悪魔より強くて、人型は美男美女、獣型は可愛いやかっこいいを詰め合わせ、更にはガイア連合製【スキルカード】なるものを適用させることによって、転生者以外の現地霊能者達が束になってかかってきても、問題ない強さにまで完成度を上げている。デフォルトで物理耐性は流石にずるいと思います。
　そんなわけで、【俺らの血と汗と白い汁の結晶】【最終兵器俺の嫁】【画面の中から出てきてくれた俺の彼女】と評されるシキガミは、今やガイア連合内ではなくてはならない存在になっている。レベル持ち、覚醒者にしか使えないという欠点はあるが、シキガミを手に入れたいというだけで覚醒修行の地獄巡りをクリアした人物もいるぐらいだ。
　そのせいで、ガイア連合内でのシキガミ製造部はいつも戦場となっているらしい。俺も、簡単なアイテム作りにも飽きたし次のステップとしてシキガミ製造の方に手を出そうかなとか甘く考えていたが、あの現場を見たら、とてもじゃないがやろうとは思えなかった。ワ〇ミよりヤバいよあれは。
　話は戻るが、そんなこんなでハセガワさんが、シキガミを覚醒している転生者の殆どが持っているという話は事実だ。なら、お前はどうなんだというと、
「いや、居ないわけじゃないんですよ。俺もシキガミ自体はいるんですけどね」
「なら、普段はおろか、異界に潜る際にも連れていないのは何故なんですか？　私はいつも、いくら貴方が強くとも、単独での異界探索や攻略は危険だと言っていますよね？」
「あの、その、これには深いわけがありまして」
「聞きましょう」
　少し怒っているのだろう。ハセガワさんはこちらをじっと見て、嘘は許さないと瞳で訴えてきた。しかし、俺がシキガミを異界に連れ回さないのも理由があるのだ。面倒で深刻なものが。

「実は俺、ハセガワさんに担当が変わる前、中学の三年に上がったばかりの頃、何度も大怪我して死にかけたんですよ。それはもう、普通なら助からないレベルのやつを何回か」
「っ!? だ、大丈夫だったんですか？　何処か後遺症が残っていたりなんてことは！」
「ああ、落ち着いてください。傷自体はショタオジやガイア連合の医療班の人達に治してもらったおかげで少しも残ってないです」
「……ふう。あまり驚かせないでください。私が担当になったからにはもうそんな大怪我はしないでくださいね」
　懐かしい話だ。あの時はまだ、俺自身の異界への理解も足らなくて、なにより力がなかった。今思うと、良く生きていられたものだと思う。
「話を戻すと、その何度か死にかけた理由がシキガミに由来するものでして」
「まさか、反乱されて襲われたとかですか？　でも、神主さんがそういうことは出来ないようになっていると言っていましたよ」
「そういうのじゃないです。というか、シキガミに問題があったというか、どちらかというと俺自身の問題なんですよね」
「どういうことですか？」
　頭の片隅でかつての記憶を思い出させる。もう見ることはできない、あの姿を。
「俺のシキガミって猫型だったんですよ。人型だと家に置けないですしね。流石に中学生が人一人連れてきて、これ俺のシキガミだからなんて言ったら、まず間違いなく頭の病院に連れていかれますよ」
「そうですね。まだ一人暮らしの出来ない年齢の転生者さん達はそういうタイプのシキガミ持ちが多いと聞きます」
「それで、俺って猫好きなのもあって、そのシキガミを凄い甘やかしていたんですよ。あまりにも可愛くて。家族もタマにはメロメロでした」
「タマと呼ぶのですね、そのシキガミは」
「ええ、そうです」

そう、ほんの一年少しだがブスジマ家には家族がもう一人、いやもう一匹いたのだ。
「で、俺が死にかけた理由を簡単にいうと、悪魔の危険な攻撃からタマを咄嗟に守ってしまうのが原因だったんですよね。なんか、ショタオジ曰く、前世での何かしらの出来事が俺の中でトラウマになっているらしくて、それで自身の大切なものを守る際に、命の危険とか関係なく身体が勝手に反応するようになっているそうです」
「それで神主さんから、シキガミを危ない場所に連れて行かないようにしろと言われたわけですね。周りめぐってブスジマ君自身の危険に繋がるから」
「概ねそんな感じです」
ハセガワさんは俺の説明に納得がいったのか、ふむふむと頷いた。
「あっ、でもそれなら、ブスジマ君のシキガミのタマさんは今もお家にいるんですか？　猫さんなんですよね、そのシキガミ」
勉強を続けていた手が止まった。相手会社の人を接待するためにキャバクラに行ったことを聞かれている時の父親みたいに、額から冷や汗が出てくる。
「……いや、まあ、その。家にはもう居ないんですよ、タマは。正しくは、居られないと言ったほうがいいのか」
「？　なんでですか。ご家族の方々も可愛がっていたんでしょう、タマさんを？」
「何というか、もう以前のタマではないんですよ。最後に死にかけた時にシキガミボディの大部分と核の所に傷が入ってしまって……」
その時の事を思い出して、身体が震える。
「まさか、死んだんですかタマさん!?」
「ショタオジに修復がもう不可能って言われて」
「そんなっ」
「本当は家に帰してやりたかったっ！　でもそれはもう、無理なんですよね……」
「ブスジマ君……」

「だって、だって」
「もう、無理していう必要はありませんよ！　ブスジマ君の辛さ、もうわかりましたから！」
　ハセガワさんが熱く抱擁してくる。まるで、我が子を抱きしめるように、泣きそうな子供をあやすように、優しく抱きしめてくる。その行動で、ついに俺は溜まっていたものが噴き出してしまった。あれからずっと、誰にも言えずに溜まっていたものが。
「だって！　猫型から女メイドロボ風人型に変わってしまったんだあああああ！　ふざけんなよ、製造部とショタオジィ！　素体がダメだからって変えるなら同じ猫型にしてこいや！　何で人型なんだよ！　何でメイドなんだよ！　なんでロボ娘なんだよ！　何が趣味で作った余り物の素体が残ってて良かっただ!?　少しも良くねぇよ！　どうすんだよ、家に返せねぇよこれ。妹と両親になんて言ったらいいんだよ！　これ、タマなんですとか言えるわけねぇだろ!?　サムズアップしてんじゃねぇぞ製造部の野郎共ォ!?」
「はっ？　」
　全てを吐き出した俺が最後に見たのは、鬼の形相をしたハセガワさんだった。

◆◆◆◆◆

　頬が痛い。
　俺は女の人の掌サイズの赤模様を頬に引っ付けて、ある場所へ向かっていた。
　その場所は、山梨支部から歩いて直ぐのところにあった。俺がガイア連合の仕事で貯めたお金の殆どを費やして買った、ショタオジがプロデュースした、【対大破壊用シェルター】。一家庭用の一室だ。現在は家で暮らしているが、大破壊が来たり、近所のメシア教が何かやらかしたら直ぐにこちらで生活できるように準備をしている。因みに現在の利用理由は、主に妹のアサちゃんと喧嘩した時の避難場所だったりする。

個人認証を終えて、久しぶりに中に入るとお目当ての人物が顔を出した。
「お帰りなさいませ、ヒデオ様。またアサちゃん様と喧嘩なされたのですか？」
「違うよ。というかその理由でしかここにこないと思ってない？　タマの様子を見にくる時もあるじゃん！」
タマ。そう呼ばれた女性は慣れた手つきで俺の荷物を受け取ると、完璧に清掃された部屋を案内してくれる。
エメラルドのような綺麗な緑の髪に赤い瞳、何の意味があるのか良くわからない、耳についたへんな機械。そして、お団子屋で看板娘をしてそうな着物を着ていた。和風とロボが混ざっているのに違和感のない完成されたデザインは、製造部達のプライドと欲望を感じさせる。
「それでヒデオ様。喧嘩に負けて泣きながら逃げてきたのでないのならば、本日はどういった理由でここへ？」
「おい、別にいつもアサちゃんに負けてるわけじゃないからね。ここに来る時、毎回たまたま目に唐辛子の粉末が入ってきてただけだから。只の唐辛子に対する涙だからね、あれ。まあ、その、なんだ。今日、支部の方で昔のタマの話をして、ちょっと顔を見たくなったというか……」
タマが突然立ち止まり、顔をそむけた。
「そうですか。私としましては、どんな理由だろうと此処へいらしてくれるだけで感無量でございますよ、クソ虫」
「ねぇ、ちょっと待って？　最後なんて言ったお前。ねぇ、最後なんて言ったお前」
「どうかいたしましたか、クソむ、いえヒデオ様」
「おいいいい！　隠せてないよね、それ。俺のことクソ虫って思ってるよねそれェ！」
「いいから騒いでないで、さっさと座ったらどうですかクソ虫。あまり煩いと掃除しますよ、クソ虫」
「もはや取り繕ってすらくれないの!?　完全にクソ虫って言ってる

じゃん！　ごめんなさい、せめて隠す努力はお願いします！　ヒデオはとてもナイーブなの、ガラスの心なの！」

取り乱す俺と裏腹に、何処までもロボ娘らしく無表情を崩さないタマ。昔はこんな子じゃなかったのに、いつからこんな事を言うようになってしまったのか。俺の膝の上でゴロゴロと寝転ぶ、あの可愛らしいタマは何処へ行ってしまったのだろうか。

俺はため息を一つついて、ふかふかのソファーへと身体を沈めた。そして、タマの用意してくれたお茶を飲む。やはり【食事】【家事】【会話】等の戦闘スキル以外のスキルカードをたらふく注ぎ込んだおかげだろう。いや待てよ。タマがこんなに毒舌になったのはもしかして【会話】スキルカードのせいだったりしないだろうか。

「ヒデオ様、神主様よりヒデオ様へ言伝を預かっております。お聞きになりますか？」

「いや、やめておくよ。どうせろくでもない面倒事だろう？　俺は自分磨きに忙しいので他の人へどうぞとでも言っておいてくれ」

「わかりました」

いきなりタマが、ソファーに座っている俺の膝にお尻を乗せてくる。

「えっ、何してるのタマさん。膝が重いんだけど」

「神主様が、ヒデオ様が話を聞かない場合は至近距離で無理矢理聞かせてやってくれと仰っていましたので」

「ちょっと待って、何？　何で俺よりショタオジ優先なの？　もしかして俺が思ってるだけで、実はあの時ショタオジのシキガミにされているとかじゃないよね？」

「最高級黒マグロの大トロ、大変美味でした。成功すれば、次は回らないお寿司が私を待っています」

「買収されてやがるこいつ!?」

このままでは、また無理難題を押し付けられる。取り敢えずタマを退かそうとするが、途端に正面から抱きついてきやがった。そんなに寿司が食いたいか！　離そうとすればするほど、こいつ、足や手を絡めて離れないようにしてきやがる！　どんだけ魚好きなんだよ。猫

か、猫の時の名残かこれ!?
「諦めて話を聞いてくださいヒデオ様。安心してください、独占欲の強いヒデオ様。私はヒデオ様より神主様を優先しているのではありません。ヒデオ様より、お魚様を優先しているだけです。それに――」
タマは見れば見るほど精巧な顔をずいっと近づけて、耳元で吐息を吹きかけてきた。
「――ー例えヒデオ様が私を置いて那由多の先に消え去ろうとしても、私は絶対に貴方様の元を離れる気はありませんので」
「ヒェッ」
感情を読ませない顔に危ない光を宿したタマを見て、俺は謎の悪寒に襲われた。気分はまるで、狼を目の前にしたあわれなこひつじのようだった。
どうしてこうなった。
いや、原因は分かっているのだ。これも全て、俺に無理難題を押し付けたり、俺のシキガミを買収したりする愉快犯。天地創造の神を下し、万物を見下ろす力の主、ガイアの王、ガイア連合山梨支部の長である年齢詐欺ショタ、そう、全ては!
「俺のシキガミが変になったのはどう考えてもショタオジが悪い!」
後、素体を提供した製造部の奴。

《前編》日本最大の正式な霊的国防組織根願寺（笑）

「ねぇお兄さん、此方においでよ。良い夢見させてあげるからさあ～」
「クソ、あった金を全部擦っちまった！」
「おい、あっちにすげぇ美人さんがいるらしいぜ。あそこの店にしよう」

彼方此方で声が飛ぶ、人の行き交う夜の街、欲望を詰めて詰めて詰めて、すいも甘いも楽しむ欲の都。

豪華に彩られた、江戸の吉原を思い起こさせる数々の建物は夜の中にありながら、黄金の光をギラギラと輝かせながら、道ゆく人々の欲望を喰らう。女の欲望、男の劣情。此処では誰も隠さない。否、隠す必要はないのだ。それがこの街、名を【裏吉原】。

そこは、裏を知る人間しか知ることは出来ず、入ることも出来ない、日本最大の闇娯楽施設であった。

そして今現在、その知る人ぞ知る遊楽の場、裏吉原のその最奥である【夜の間】にて、とある歓待が開かれていた。

夜の間。それは謎の多い裏吉原の中でも、一際、煙に包まれている存在だった。

噂では、そこには悪魔も靡く絶世の花魁が抱ける、この世で最高の悦を味わえる、実は青い狸がいて戻りたい過去に戻してくれるなんていうのもある。入ることが出来るのは、この裏吉原の現在の主【夜王】か、日の本最大の霊的国防組織【根願寺】の上位層ぐらいという。

だが、実際に夜の間が開かれている所を見た者は殆どおらず、最後に見たのは戦後のメシア教と日本の友好条約を結ぶ場として利用されたのが最後という話まである。それが今宵、何故か開かれていた。

それもあの、【根願寺】が相手側の為に開いたという話まで出てきている。

根願寺とは、築地に本拠点である寺を構える、裏の存在でありながら日本政府にまで支持されている、国が認める日本最大の、正真正銘の正式な霊的国防組織である。

その権威は、この業界にいる者なら殆どの者は逆らえないほどで、

今でこそ破竹の勢いで、地方の霊的災害、霊地活性化の抑制、重要霊地の維持等を新参の【ガイア連合】に任せているが故に良くない噂が多くなってきているが、それでもなお、陛下からの信頼で日の本の中心である東京守護を任せられている。
　そんな根願寺が、一体誰をどんな目的で夜の間に呼んだのか。今宵の裏吉原では、その話が酒のつまみになっていた。

「さあさあ、遠慮せずにお呑みくだされ。此方はかの酒呑童子を屠る為に使われた神便鬼毒酒を酒造した家の者が、長年をかけて作り出した秘蔵の酒でございまするぞ！」
「いや、俺未成年なので……」
「おお、それでは、此方の寿司はいかがでしょう。江戸時代から続く老舗の寿司でございまして、それはもう美味でございます」
「それではわっちが、お酒の代わりに何か飲める物を用意させますね」
「あ、ありがとうございます」
「これこれ、其方もそうせっつかれては困ってしまいますぞ。その方らも落ち着きなさい」
「いやいや、面目ない。ワシとしたことがついつい舞い上がってしまいましたぞ！」
　代わる代わるに差し出される豪華絢爛な品々。室内の雅さも相まって、まるで自身が王族か何かになった気分になりそうだ。周りには、サキュバスにも劣らぬ美貌の美女が、綺麗で蠱惑的な着物を着崩しながら密着してくる。
「いやはやしかし、ガイア連合の長にも感謝しなければいけませぬな。急な申し出だったというのに、まさかあの【氷呪眼】のヒデオ殿を寄越してくださるとは思いませぬゆえ！　がはははは！」
　何故こうなった。
　陰陽服に身を包み、キョンシーみたいに紙をお面代わりか顔にかけて、愉快そうに笑う根願寺の皆さんを呆然と眺めながら、俺は心底そう思った。此処に俺がいるわけは、今から一週間ほど前まで遡る。きっかけはガイア連合の愉快犯筆頭に捕まったところからだった。

◆◆◆◆◆

「――君にはこれから、築地の根願寺に行ってきてもらう」
ガイア連合の始まりの地。星霊神社の本殿最奥の間にて、陰陽服を纏う小柄な少年らしき人物、ガイア連合の主、通称ショタオジはそういって、ニヤリと俺を見下していた。
あれから俺は、なんとかタマの拘束から逃れて、翌日、本人から直接話を聞いて断ってやろう。そう意気込んで、星霊神社の本殿へカチコミをかけた。そして、今、本殿の床に縄で身体を縛られて、無様に転がされていた。
俺をこんな姿にした張本人である、年齢詐称の原罪を持つ、ガイア連合でも一二を争う愉快犯はニヤニヤと笑みを浮かべている。クソッ、今回も傷一つつけることが出来ずにあしらわれた。一体俺と彼の間にどれ程の力の差があるのか、数年鍛え上げたがその足元さえ見えてこない。
「まあまあ、そんな酷い顔しないでくれよぉ。これは君にしか出来ない仕事なんだ。報酬も弾むし、これが終わったらちゃんと休みあげるからさ」
「嫌だ嫌だ！　そういって、何度裏切られてきたと思ってるんだ！　どうせ今回の仕事が終わっても次が回ってくるんだろ！　折角進級できたのに、また単位が危ぶまれる事態は真っ平御免だね！」
「でもトラポートが使えて、日本各地なら何処でも一瞬で行ける人材は中々いないんだよぉ？　それに優遇処置だってとってるじゃないか。最新装備の優先配備とかメシア教の動きに対する情報の最速での知らせ、他にも依頼等がごたつかないようにワンオフの事務担当つけたりとかさ」
「くっ。し、しかし俺にも他の人との都合があってですね……」
「どうせ付き合ってる彼女とかいないんだし、妹ちゃんとゲームか、ハセガワさんの所でレベリング用の異界を教えてもらういつものでしょ」

沈黙。俺に出来るのはもはやそれだけだった。此処でこれ以上反論しても、俺が周りに友達も彼女も居ないのがどんどんバレていくだけだ。それにショタオジのいうことが図星すぎた。何でこの人、俺のこの後しようとした行動を知っているんだよ。エスパーか何かかこいつ。
「よし！　もう文句もないようだし、それじゃあ明日にでも頼むね。彼方さんも今回のはだいぶ焦っているらしくて、人を一人でいいから寄越せと煩かったからな」
「ちょっ、ちょっと待ってください！　せめてどんな仕事かぐらい教えてくださいよ！」
「まあ、あっちに行けばすぐにわかると思うけど、ただの異界攻略だよ」
「はあ？　なら俺一人に言わないでもっと大勢で一気にやれば良いじゃないですか」
「それが場所的に僕達じゃ手を出すと面倒なところが異界化しちゃってね。だから今回は普段動かない、あの日本最大の霊的国防組織（笑）が先頭に立ってやらないといけない案件でね。だからガイア連合としては、動かせたとしても多くて三人くらいなんだけど、君以外に都合のつく人がいなくてね」
　面倒臭そうにそうぼやいて、ショタオジはため息をついた。何かしら裏の政治的に面倒事でもあったのだろうか。基本そういう面倒事は、ガイア連合員の俺らはショタオジを含めた運営陣に丸投げしている面があって、ショタオジのその姿を見て少しだけ罪悪感が芽生えたりした。
「おっ、その顔は少し申し訳ないとか思っているな？　でも大丈夫、このくらいなんて事ないさ。これでも連合の長だからね。君達が大破壊を生き抜く為に頑張るなら、僕はそれを全力でサポートするさ」
「ショタオジ……ごめん、俺が我儘でした。任せてください！　この仕事はしっかりと終わらせてきますから！」
「ありがとう、そういってくれると思っていたよヒデオ君！　いや、やっぱり持つものは便利な手駒、いや間違えた、信頼できる仲間だね

！」
「おい、ちょっと待てお前」
「それじゃあね。頑張ってくれたまえよ、若人！」
「あっ！　おい待て、逃げるな！　縄解いていけこの野郎ぉ！」

◆◆◆◆◆

その後、ショタオジのシキガミ《オンギョウキ》に縄を解いてもらって、準備して根願寺にトラポートしたのだが、根願寺の方々に何故か大いに歓迎され、俺は今、裏吉原という遊郭みたいなレンジャー施設？　に来ていた。

此処には色々な物がある。カジノや闘技場、酒場に女郎屋。およそ、人間が欲を露わにする施設はあらかた用意されている。どうやら、此処には日本中の裏の人間が来るらしく、海外のエクソシストらしき人間も見かけたことから、だいぶ人種の坩堝とかしているようだ。

そしてこういう場所は、外に漏らしたくない大切な情報を話す時にはうってつけの場所らしい。わざわざ根願寺から移動して此処に連れてこられた時は、一体俺をどうするつもりなのかと警戒したが、なんてことはなく、仕事内容を話すついでに俺を歓待してくれようとしたらしい。これもガイア連合の名が裏に広がったおかげだと思うと、少しは鼻が高くなるという物である。

「それで、今回はどういった用件でウチに人の派遣を頼んできたんですか？　簡単な異界攻略だとは聞いているのですが」
「はい。今回の事はまだ大きな騒ぎにならぬよう、内々に処理をしなければいけない異変でございまして、本来なら我々だけで解決しなければならないのですが、遣わしたうちの手の者が誰も帰ってこないので、東京守護に人員を割いている現状、此れは少しばかり手に余るとガイア連合の方々に協力を依頼させていただきました」
「その異界はそんなに強力なものなんですか？」
「はい。元々の霊地としての核もさることながら、その知名度から人

の思念も多く集まる場所でして、今まではこの様な事態になったことが無く、前例もない程に強くなっているはずです。根願寺でも指折りの強者を派遣しましたが、結果は先程の通り、つきましては、どうかガイア連合殿には力を貸していただきたく！」

そういって頭を下げる根願寺の人達。事態をよほど深刻に見ているのか、先程の歓待の時にあった浮かれようはなりを潜め、重い空気を出していた。だが、俺からすると根願寺の精鋭が攻略出来なかったと言われても、それで危険度の判別はできなかった。理由は一つ。根願寺の霊能者達がまあ、控えめにいってもあまり頼りにならないというか、役に立たない。率直にいえばクソザコナメクジだからである。

ショタオジ曰く、元々俺を含める転生者達は霊的才能はガチャでいうＳＳＲ相当であるらしく、現地民からすれば化け物レベルの才能持ちばかりだという。では、日本最大の歴史的権威のある、日本政府が唯一認めるほどの正式な霊的国防組織である根願寺はどの程度かというと。何と恐ろしいことに殆ど全員、Ｎ、ノーマルレベルの才能しかない。

俺達が重賞確定レベルの名馬なら、あちらはサラブレッドどころかロバである、ロバ。

そんな才能なしの中の強者（笑）が異界で死のうと、その異界がどれだけ危険なのかなんて皆目見当つかない。何の判断材料にもならないからだ。

まあ、しかし、現地民の霊能者があまりにも弱いのには理由があって、第二次世界大戦後にアメリカに根を張っていたメシア教が、敗戦国の日本で幅をきかせて、当時の才能ある霊能力者達を、日本の神様もろとも皆殺しか封印処置にしたからであるらしい。そのせいで、現在はメシア教に放置されるレベルの才能がない落ちこぼれの霊能者か、その血を受け継いだロバしかいないのが真実なのだ。

何故俺がこんなことを知っているかというと、あの恐山の〇〇〇歳超えの恐怖！　合法ロリババア！　である長老からこの話を聞かされたからである。

あの婆さん、里の団子屋で、俺の奢りでルリちゃんやガキ共に一緒

に甘味を摂っていたら、まるで世間話でもするかのようにクッソ重い昔話してきやがった。ルリちゃんは涙目になるし、ガキ共は泣き出すし、俺も何か団子が塩味になるしで最悪だった。

ただ、やはりメシア教はこの世界でもクソの塊であるという事実を生き証人である長老から聞けたことにより、俺の中にあったメシア教へのイメージはより鮮明になった。メシア教、死すべし。因みにこの話はハナヤマさんにはしていない。言ったが最後、必ず憤怒して近くのメシア教教会にカチコミかけに行きそうだからだ。

「頭を上げてください。俺はその為に来たんです。是非、協力させてください。歓待ももう十分堪能しました。早速その異界に向かいましょう」

「おお、なんと心強いお言葉か。わかりました、それでは直ぐに迎えの準備をさせましょう。ヒデオ殿は、私達の実行部隊のサポートをお願いいたします。既に我々の部隊は現地に行っておりますゆえ」

「わかりました。それでその異界化した場所は何という名前なのでしょう」

まあ、そんなにやばい異界ではないだろう。だって俺一人しか派遣されてないし。ショタオジはあれでいてガイア連合員には駄々甘で過保護な所があるから、死ぬ危険性のある場所はそうそう仕事として寄越してこない。どうせ今回も現地民がヤバイヤバイと騒いでいるだけで大した事はないだろう。そう俺は高を括っていた。

だってスライムしか出ないような小さな異界を、世界の危機だ、終末の始まりなんだとかほざいていた所もあるくらいだ。現地民のオーバーリアクションなんてガイア連合員で異界攻略を何度も経験した人間なら大して気に留めない。

しかし俺は失念していた。確か、根願寺の人達はこう言っていた。知名度があると。

そして異界とは、割と霊地としての格と同じくらい、人からの知名度が影響し、その脅威度を上げることを。歴史的な建造物で霊地も良く、だが知名度はそこそこなものより、大型異界【犬鳴村】のような知名度だけが形作ったような異界の方が案外厄介であることを。

「はい、今回異界化した場所はかつての都にあり、世界的価値も認められた建造物。醍醐寺の【五重の塔】でございまする」

《後編》五重の塔、世界遺産やめるってよ

【五重の塔】。五層に屋根を積み重ねた形に建てた五階の仏塔で、地・水・火・風・空の五大にかたどったもの。　五重の塔婆。醍醐寺の五重の塔は有名だが、それ以外にもいくつか点在しているそれは、中国から来た文化らしい。仏教を主体とした考えで作られたこれは、日本だけではなく、各国にも名が知れ渡る程度には有名な建造物だ。

その中でも醍醐寺の五重の塔は、世界遺産にも指定された、日本の誇り、守り抜くべきものであり、決して悪魔に乗っ取られたのが世間一般にバレてはいけないものだそうだ。車に乗りながら、俺は隣の席でそれはもう熱く語ってくる、紙を顔に貼り付けたおっさんに適当な相槌をうちながら、そんな話を聞いていた。

根願寺の人的には、今回の事態はとてもおかしなことらしい。何でも、世界遺産にまで登録されるほどの建造物で、知名度も高く、京都という日本六大都市の一つにあり、その上、醍醐寺の厳重な管理と根願寺の結界によって守られた五重の塔が、異界化するまで異変を察知出来ないなど、意味が分からないことなのだそうだ。

まるでほんの一瞬で異界化が完了したと言わんばかりらしい。それは無理なんですかと聞いたら、まずそんな現象はあり得ないと言われた。

例えるなら、朝慌てて仕事へ行こうと家を飛び出して、途中で忘れ物をしたことに気づき家に戻ったら、妻が知らない男と寝ているくらいには有り得ない事なのだそうだ。どうでも良いけど、その話、世の中に割とありそうだよね。というかそれ、紙顔の人の実体験じゃないよね。なんか妙に血気迫る感じで話してたけど、それ実際に会ったことじゃないよね。あり得ないってそれ、こんな事あり得るわけがないっていう現実逃避じゃないよね。

そうこうしているうち、目的の場所である京都の醍醐寺、その五重の塔までやってきた。来る途中に不自然なほど人がいなかった理由は、何でも根願寺の秘術。人払い＆ａｍｐ；認識阻害の結界によるも

のらしい。それでいつも東京の街中等で悪魔を退治する際に、一般の人々にバレないよう隠蔽しているらしい。
　辺りを見渡すと異界の入り口周辺には、なんかテレビで見た偉そうな人がいっぱいいた。特に、強面で奥の方にいる根願寺の人と話しているあの人、後で聞いた話だと京都府警の警視監だった。やっぱり日本政府に支持されるような所は表のコネも凄いんだなと、少しだけ俺の中の根願寺の評価が上がった
「紹介します。これらが今回、ヒデオ殿につける部隊の隊長でございます。捨て子の卑しい身分を集めた部隊ですが、全員が退魔士として才は中々のもの。いかように使い潰しても構いませぬので、早急な異界攻略。宜しくお願いしますぞ」
　根願寺の人が案内役を紹介してくれた。どう見ても、俺より年下の女の子だった。紫の髪に茶色い瞳。纏っている礼装は他の現地民と比べても中々のもの。ショタオジから貰った、試作段階の五十レベルまで測れるかもしれないになったというアナライズ機械で見てみると、そのレベルは九。
　少なくとも、今まで見てきた同年代の子の中じゃ一番強い。しかし、強いということはそれだけ修羅場を潜ってきたという事で。現地民なのに、この歳でこのレベル。そして、この子以外も全員、捨て子であるという先の言葉。更には、卑しい身分とかものたまってた事から、常にそういう扱いなのだということが簡単に想像できる。
　俺の中にあった根願寺の好感度。先ほどのプラス分を振り切ってマイナスです。俺は可哀想な女の子じゃ抜けないんだよ！
「ご紹介に預かりました、ヒデオです。よろしくね」
「ツキジ　シオンと申します。ヒデオ様、よろしくお願いします」
　お互いに自己紹介を終えて、それからシオンちゃんの部隊へ挨拶をしにいく。
「紹介します。この子達が私の部下、【ミナシゴ】の全隊員です。ヒトミ、フタバ、ミツコ。この方は今回の異変解決にあたり、ガイア連合から協力に来てくれたヒデオ様です。ほら、自己紹介して」
「ヒトミです！」「フタバです！」「ミツコです！」

「「よろしくおねがいします！」」
根願寺いいいい！　アウトォ!?　これどう見てもアウトだよぉ！　小学生はあかんやろ、小学生は！　いくら才能があるからってお前、倫理観ゼロかよ、根願寺ぃ。というか部隊名！　さっきは殆ど聞き流してたから、部隊名とか知らなかったけど、【ミナシゴ】ってど直球すぎるだろ。火の玉ストレートだよ、軽く百七十キロは出てるよこれ！　手加減してくれよ、根願寺！　異界云々の前に俺のメンタルボロボロだよ！　やめてくれよ。こんな妹より小さな子供を戦わせれるわけないじゃん。そもそも、平均ニレベルくらいしかない。これを異界に突っ込むってもう遠回しな殺人と同じだぞ、根願寺！　東京に引きこもってないで、地方もどうにかしろ根願寺！
根願寺に対するありとあらゆる文句を心の中で叫びながら、俺はとりあえず、この子達と仲良くすることを選んだ。俺がこの子らを守るんだ。そう意気込んで、俺の五重の塔攻略は始まった。

◆◆◆◆◆

攻略は意外なほどスムーズに進んだ。元々、あまり長くは隠し通せないので早急な解決を頼むと言われていたこともあり、俺、ツキジちゃん達、あと根願寺の本隊で、一週間以内を目処に進めていたのだが、出てくる悪魔も然程強くなく、シオンちゃんなら一人でも何体か纏めて倒せるし、ヒトミちゃん達三人も上手いこと連携して、悪魔を倒している。
不甲斐ないのは本隊の方で、この程度の悪魔にも数で囲って漸くといった感じだ。これでは、どの口がこの子達を馬鹿にできるのかと、文句のひとつでもこぼしたくなる。
そして、休憩を挟みながら一層、一層浄化していった結果。三日目で異界の最奥に辿り着いた。そこに居たボスらしき悪魔も倒した。皆、喜んでいたが俺は少し気にかかっていた。この異界のあまりに簡単な難易度に。
俺は最初にこの五重の塔が異界化したと聞いた際、【恐山】クラスの

異界になると踏んでいた。だが、結果はそこらの中小異界程度のもの。はっきり言って、シオンちゃん達は苦戦していたが、俺からしたらボス悪魔も何の歯応えもなかった。

そう、歯ごたえがなさすぎるのだ。少なくとも【恐山】クラスなら、出てくるボス悪魔のレベルは最低でも二十は下らないだろう。それが出てきたのは、レベル十五の邪龍【トウビョウ】。肩透かしもいい所だ。何かがおかしい。答えは出なかったが、妙な違和感が頭から拭えない。俺がそうやって頭を捻っていると、答えはあちらの方からやってきた。

床がいきなり裂けて、皆が真下へと真っ逆さまに落ちていく。俺は咄嗟に、近くにいたシオンちゃんを捕まえて異界の奥に飲み込まれた。

気がつくと、そこは洞窟の中だった。どうやらこの異界の主は中々に悪知恵が働くらしい。態と表の異界を緩くして、調子に乗って奥まで来た相手を、本当の異界の中心へ引き摺り込む。こうすることで、簡単に異界から抜け出せないようにしたのだ。俺のようにトラポートが使えるなら話は別だが、こんな形で異界の奥へ飲み込まれたら、普通ならボスを倒さない限り外に出ることは不可能になる。

まだ、異界の手前入り口の辺りなら逃げることもできたが、あそこまで奥に誘い込んだ上でのこれをされれば、それも叶わない。

とりあえず、意識を失っていたシオンちゃんを起こして、異界の中心は向かった。どうせ出るならボスを倒さないとどうしようもないし、ヒトミちゃん達を探すためにもだ。

そして、表の異界ボス並みの雑魚悪魔どもを蹴散らして、ボス部屋へと辿りついた。そこには想像通り、ヒトミちゃん達がボス悪魔に囚われていた。

ボス悪魔の名前は【ラクシャーサ】。何度か戦ったことのある悪魔だった。レベルは二十五。強さは問題なかったが、人質がいるのが辛い所である。聞けば本隊の連中と前に異界へと突入した根願寺の精鋭は、全員ラクシャーサが食べたらしい。どんだけ大食いなんだこいつ。幼女はデザートとして残したとか言っていた。何故人喰いの悪

魔は子供の肉が大好きなのか、これがわからない。柔らかいのが好きとか、歯が弱い老人かこいつら。

人質に取られたヒトミちゃん達がとても大事なのだろう。シオンちゃんは取り乱していた。俺も異界へ入る前に守ると誓った手前、みすみす目の前であの子達が喰われるのを見ているわけにはいかない。出来るだけ早く、こいつを倒そう。

俺は速攻でラクシャーサをボコった後に魔法で脅して、ヒトミちゃん達人質を回収。ラクシャーサには、騙して悪いがこれも仕事なんでなを喰らわして終わらせた。

その後、気絶していた三人は俺が持っていた隠し玉の【トラポート石】でシオンちゃんに三人を任せて、異界から脱出させる。そして俺も後を追うように異界から出ようとしたが、ここでアクシデント発生。

何処から現れたのか。強烈な威圧感を放つ悪魔が俺の逃げ道を異界を再構築することで塞いできた。そのせいでトラポートを使った脱出も不可能に。逃げたかったけど、どうやらそういう訳にもいかないらしく、泣く泣く応戦することに。

そして予想通りというべきか、それはもうボコボコにされる。まだ未熟で、良く異界内でガキパトしそうになっていた中学の頃を思い出すレベルで死にかける俺。フリーザ様にボコられるベジータの気分だ。早くてきてくれ、悟空ー！

だが、いくら呼んだところで悟空さが来てくれるわけもなく、だからといってこのままおめおめと殺されるわけにもいかない。何故なら、こんな所で死んでは、妹のアサちゃんを泣かせてしまうからだ。

妹を泣かせないよう、どんなに強い敵であろうと死んではいけない。そして、この場から離れるためには敵を倒すしかない。『死んではいけない』。『自分より強い敵を倒す』。『両方』やらなきゃいけないのが『お兄ちゃん』の辛いところだな。覚悟はいいか？俺はできてる。

もうここまで来たら、後先考えない徹底抗戦だ。俺は腹を決めて、【隠密特化型アガシオン】による溜め込んだ戦闘用アイテムの大盤振る舞いと、奇策、搦手、根性、異界内でしか使えない【奥の手】を駆

使して、悪魔に辛くも勝利した。
しかし、ギリギリの戦いだったせいで、異界を脱出する力はもう残ってなかった。俺の第二の人生もこれまでかと思った矢先、先に避難させていたシオンちゃん達が、戻ってこない俺を心配して連合へ連絡してくれていたおかげで、俺はガイア連合員達によって救助された。
その後、ガイア連合の医療班により集中治療された俺は、治ったはいいが一週間ほど意識不明だったらしく、五重の塔異界事変の、事の顛末はショタオジに聞くことになった。どうやら、何とか異界化自体は鎮まったらしい。まあ、あそこまでやってまだ他に悪魔がいましたなんてなったら最悪だしな。
ちなみに、あの時最後に戦った悪魔は龍王【ゲンブ】。その不完全顕現体と呼ばれる存在でした。何とレベルは驚愕の四十五レベル。
今考えてもよく勝てたな俺。同じ条件でもう一度やってみろと言われても、絶対に無理だと思う。そういえばあいつ最後、黒い神父に利用された云々と言ってたけど、あの言葉の今は何だったのか。というか黒い神父って何だよ。ただの黒人神父さんじゃないのかそれ。
まあ、いい。今はただ寝よう。ショタオジから聞いた話の最後に出てきた、ゲンブとの戦いの余波で、異界の中を貫通して五重の塔の天井部分が吹き飛んだなんていう話は聞いていない。聞いていないといったら、聞いていないのだ。
世間では【五重の塔爆破事件】と呼ばれるそれは、世界遺産である五重の塔が人知れず天井部分を爆弾でも起爆させたかのように破損されているのを複数人が発見したのがきっかけの事件で、現在は日本警察の総力を持って海外のテロリストによるものと判断して捜査されていると、日夜、テレビやネットのニュースはこの話で持ちきりらしいとか知らない。
こういうのは全力で見ないふりをするのが正しいと、俺はこれまでの人生で学んだのである。第一、俺は悪くない。一生懸命やった結果なのだから。俺がテロリストなら、元はといえば杜撰な管理であの場所を異界化させた根願寺が悪いのだ。これで逮捕なんかされないよ

ね？　ある日いきなり警察が飛び込んできたりしないよね？　あの場所に京都府警のお偉いさんもいたし、事情は伝わっているよね？

こんな不安に駆られるのも、入院したせいで出席日数が足りなくなるかもしれないのも、この大怪我の理由を家族にどう伝えるのか憂鬱なのも、そう、全ては！

「俺がテロリスト予備軍な扱いを受けそうなのはどう考えても根願寺が悪い！」

あと何故か、シオンちゃんが俺の高校へ一年生として転入してきた。

《三人称視点・前編》英雄堕ちるは、五重の塔

【五重の塔異界化異変】。ツキジ　シオンが彼に出会ったのは、その異変が始まりだった。

全国各地に散らばっている偵察や情報収集を主とした情報伝達部隊【根】。その一人が、根願寺に信じられない一報を届けたのが、全ての始まりだった。その内容は、五重の塔が異界化したというもの。

ありえない。そう誰もが笑った。

確かに京都は平安時代には鬼や妖怪が跋扈する場所だった名残から、鬼系統や妖怪に連なる悪魔達が顕現しやすい土地柄ではあった。

だが、京都に位置する醍醐寺の五重の塔。それが異界化するなど、今までの事例から見ても、まずあり得ない事であったのだ、何故なら、【犬鳴村】や【印巣枡】等の既に霊地として一定の力があり、それでいて人の管理が行き届かなくなるような僻地ならば、異界化したりする事もわからないでもない。

しかし、五重の塔は醍醐寺の方々が常に結界を通して霊地を管理している。その上、根願寺も東京ほどではないが、昔の日本における首都だった事からも場所自体の価値を認めて、地方よりも厚く結界等で守りを強くしていた。それこそ、一片たりとも悪魔が侵入などできないように。

それが何の前触れもなく、突然かつての【恐山】レベルの異界へなる訳がない。最初のほうは皆そう考えていたが、実際に醍醐寺の坊主や根願寺の者から被害者が出ては認めないわけにはいかなかった。

そして、事態を重くみた陛下と日本政府により、根願寺に早急な事件解決を命じられ、今に至る。

現場では、一般人に異変が漏れないよう、周囲に認識阻害と人払いの結界を張っている隠蔽班や、内密にやってきた京都府警の警視監が根願寺の者と話し込んでいる。世界遺産の五重の塔が異界化したなど、世間に少しでも漏れたら、それこそ日本は終わる。謎の悪魔なる存在をひた隠しにしていたと市民は暴動を起こすだろうし、米国のメ

シア教も黙ってはいまい。
　シオンは、異界化した五重の塔の前で慌ただしく動きまわる者達を、そんなに慌てても仕方がないだろうと思いながら観察していた。
「あっ、隊長！　此処にいたんですね。あの、【顔紙付き】の方がお呼びです！」
「わかりました。直ぐに向かいます」
　シオンは慌ててやってきた、まだ幼い部下を一撫でして、呼ばれた場所へ向かう。
【顔紙付き】。根願寺の中でもとびきりの重役。普段は東京から絶対に動かない石像が一体何の用なのか。今回の事態はそれほど重いという事なのだろう。そう考え、向かった先には目的の人物と見知らぬ男が待っていた。
　根願寺の重役が誰かを連れてきた。今更誰を。それに、無駄にプライドの高い奴等が部外者を頼るなんてどういう風の吹き回しか。前回送った、自慢の精鋭部隊が五重の塔から帰らなかったのを見て尻込みでもした、なんてことが理由だったのなら笑ってしまう。
「紹介します。ヒデオ殿、此奴は我らが根願寺の対緊急霊地、異変解決部隊【ミナシゴ】の隊長です。陛下から直々に東京守護を任せられている我等と違い、所詮は卑しい捨て子の身ゆえ、東京の守りには使えませぬが、この様な事態の時には便利な駒でございます。どうぞ、如何様にもお使いください。おい、お前。此方の方はかの【ガイア連合】の精鋭、【氷呪眼】のヒデオ殿じゃ。今回の異界攻略、お前達をこの方につける。くれぐれも失礼のないようにするのだぞ！」
　シオンは顔に出さなかったが、驚いていた。顔紙付きほどの重役が下手に出ている。あの腐りきったプライドだけの塊が、内心はわからないが相手を立てているところをシオンは初めて見た。そしてそれをさせていた男へも興味が湧いてくる。
「私はツキジ　シオンと申します。ヒデオ様、今回は宜しくお願いします」
　シオンは、下げた頭から男を凝視した。
「あ、うん、よろしくね。えっと、ツキジちゃん。いや、さんの方がい

いかな？」
「……好きにお呼びください」
「わかった。宜しくね、ツキジちゃん」
　ボサボサの頭にまるで覇気の感じられない佇まい。眼は鋭く、その瞳は澱んでいて気色が悪い。背丈と声色、見た目から判断してもまだ中学生程度、もしかしたら年下かもしれない。シオンの異界を何度も鎮めてきた経験からくる、相手の強さを測る目で見ても、大した力は感じられなかった。本当にこの男が、あの【ガイア連合】の人間だというのか。
【ガイア連合】。ここ数年でその勢力を著しく成長させている新興霊能組織。
　根願寺ですら手に負えない規模の大災害、各地方の同時多発的霊地活性化に伴う、異界の増加。東京の守護に力を割かなければいけない根願寺は、地方を見捨てるしかない。このままでは日本が大規模な霊災に飲み込まれる。そう危惧されていた矢先に、彼等は現れた。
　一人一人が、並みの霊能者を凌駕する力を持ち、瞬く間に各地の異界を封印、ないし破壊していく彼等【ガイア連合】は今や地方の救世主と呼ばれるほどに裏の影響力を高めていた。
　そんなガイア連合の精鋭であり、【恐山】【羽生蛇村】【マヨヒガ】を含む大型異界を始め、３０を超える中小異界を攻略した。あの【氷呪眼】が目の前の男であるなど、シオンはとてもじゃないが信じられなかった。
「ツキジちゃん。俺は今回、サポート要員として派遣されたんだけど、どんな感じで異界を進むのかわかる？」
「前回は少人数で向かい、成功しなかった事から。次の突入時は、私達のグループとは別に根願寺の子飼い霊能者グループが、同時に異界へ行く作戦のようです」
「わかった。それじゃあ俺はどう動けばいいかな？」
「……そのぐらい、自分で考えてください」
「あっ、はい、すみません」
　任務を遂行する為にも自身の管理する部隊へ男を連れて歩きなが

ら、シオンは心の中で憤慨していた。期待はずれだったと。
自分はこれでもエリートなんだ。顔紙付き等は馬鹿にして蔑んでくるが、幾つもの異界を渡り歩いてきた結果、今や根願寺に私を倒せる霊能者は存在しない。そう断言できる程度には、シオンは強かった。
だというのに、回ってくる仕事はどれもこれも下らないものばかり。上の連中は高貴な我らにこそ、崇高な使命である東京守護は相応しいと語り散らしているが、はっきり言ってその実力は、高すぎるプライドと反比例するようにゴミだ。唯一誉められる点があるとするなら、都会で悪魔を一般人に知られないよう退治する為に磨き上げられた、この場に張り巡らされた認識阻害と人払いの結界くらいである。
今回、遂に陛下から直々に命を下されるほどの大規模異変を担当することになり、漸くクソ共を見返せる機会がきたと思えば、こんな冴えない中学生かもわからないような男のお守り。私はこれでも今年で十六歳なのにと、シオンは不満を心の中で吐き散らしていた。
「紹介します。この子達が私の部下、【ミナシゴ】の全隊員です。ヒトミ、フタバ、ミツコ。この方は今回の異変解決にあたり、ガイア連合から協力に来てくれたヒデオ様です。ほら、自己紹介して」
「ヒトミです！」「フタバです！」「ミツコです！」
「「よろしくおねがいします！」」
「お、おう。よろしくね。……全員まだ子供とか、マジか」
何やらげっそりとした顔になったヒデオを無視して、シオンは部下達にもう一度朝にやったミーティングを確認する。そして、その終わりとほぼ同時に、【五重の塔】の異界攻略が始まった。

◆◆◆◆◆

各部隊が慎重に侵入した【五重の塔】の中は、異界化したにしては不気味なほどに、建造物の構造がそれほど変化していない。出てくる悪魔はどれも手強かったが、それだけ。本来ならもっと変化している

はずの中身が変わっていない。それが、シオンの経験から来る勘が警戒を告げていた。
しかし、そんなことで足を止めるわけにはいかない。エリートとしてのプライドが、何より今回の仕事を失敗した際の自分達の立場の危うさが、シオンの足を早めさせた。
そして異界攻略の三日目。シオン達は異界の一番奥まで辿り着いた。
異界の奥には、邪龍【トウビョウ】が待ち受けており、本隊を主軸にシオン達とトウビョウの激戦が始まった。
その戦いは激しく、シオン自身も大きく疲弊した。最後は、サポート要員のヒデオが持っていた氷結の魔力を付与された魔石を、シオンが愛用の鎌ごとトウビョウに叩きつけて、戦いは終わった。
戦いが終わると周囲に安堵の雰囲気が流れ始めた。激戦が終わってしょうがない所もあるだろう。しかし、シオン達の背後にいたこの異界攻略隊の本隊は、それはもう見事なまでに気を抜いており、こんなのが今の根願寺の精鋭部隊かとシオンは嘆いた。
シオンが、今回の戦いで十日から参戦させていた部下達も、三人が三人とも、お互いに大きな怪我が無いことを喜び合っている。シオンはそれを見て、自然を笑みをこぼした。良かった。これで暫くはあの子達も居場所がなくなったりはしないだろう。
しかし、皆空気が緩むそんな状況で、ヒデオだけは腑に落ちない顔をしていた。
活躍できなかったのを悔やんでいるのだろうか。最後の決め手は、彼の持参したアイテムのおかげだし、戦闘中はあまり動いてなかったが、一様は上の呼んだお客様だ。少しは褒め称えた方がいいだろう。シオンはそう思い、彼に話しかけようと近づき、
「何か変だ。これはもしかして罠――ー」
『――ーよく気づいたな、小童。だが、もう遅い』
突如、足元にある木造の床が裂ける。罠だった。そうシオンが気づいた時には遅く、皆が落ちてゆく。シオンは咄嗟に部下達を守ろうと手を伸ばすが、その手は虚しく空を切った。

「起きろ。起きろツキジちゃん！」
体を誰かに揺さぶられる。
私は何をしていたんだっけ。意識がうまく覚醒せずに、ぼんやりとしたモヤが頭にかかっている。そうだ、確か待ち望んだ出世のチャンスが来て、あの子達にもやっと美味しいものが食べさせられるように――ー。
「ヒトミ、フタバ、ミッコ!?」
シオンは起き上がり、周囲を見渡す。だがそこには、愛する部下の姿はなく、ヒデオと岩肌しかなかった。
「ヒデオ様！　ヒトミとフタバとミッコを見かけませんでしたか!?あの子達はまだ実戦経験も少なくて、あの、その！」
「落ち着け」
「これが落ち着いていられますか！　あの子達は力があるだけでまだ十歳なんですよ!?　戦うことでしか居場所を得られないから、あのクソ共が無理矢理戦わせているだけで！」
「いいから、落ち着いて俺の話を聞け！」
ヒデオの一喝が辺りに響く。シオンはその声にあてられて、冷静さを取り戻した。
そうだ、確かに異界内で逸れてしまったがあの子達も最低限の自衛する能力はある。少なくとも一緒にいたあの男共よりよっぽど強いのだ。ここで私が取り乱して、それで状況は良くなるか、いやならない。ならば、一刻も早く彼女達を見つけるためにも一度、落ち着こうと。
「おそらく、今俺たちがいる此処こそがこの異界の核に近いと思う。異界の広さは限界がある。霊地の強さによってこの限界は変わるが、この異界はその広さを俺達を油断させる為に、騙す為に大部分を使っていた。ならば、あちこちに悪魔の気配がするこの場所は広さ的には狭いはずだ。つまりは合流するだけなら簡単。異界の中心、核を目指せばいい。そうすればヒトミ達も見つかるだろう」

「わかりました。それなら早く向かいましょう！　もう異界の核の場所について目星はついていますか？」
「ああ。俺たちの今いる洞窟エリアから真っ直ぐ向かった先に悪魔の集団がいた。異界内では、核に近いほど悪魔が湧きやすい。だからあっちの方へ行けば自ずとボス部屋まで行けるはずだ」
「なっ、無茶です！　たった二人で悪魔の集団のいる場所を突っ切るなんて！　相手の強さもわかっていないんですよ!?」
　何を言っているんだこの男は。いくら私が強くとも、トウビョウ相手に疲弊した今は、並みの悪魔相手でも一対一で苦戦する。それを複数体、嫌集団の規模によれば二桁にいくかもしれない数を相手取るなんて不可能だ。そう弱気になっていたシオンに、ヒデオは笑って頭を撫でた。
「大丈夫だ。ツキジちゃんは俺がちゃんと守るさ。ヒトミちゃん達も必ず助ける。俺はこれでもツキジちゃんよりは人生の先輩だぞ？　任せておけよ。これでも俺、なかなか強いんだぜ？」
　こんな時に笑っているなんて、おかしな奴。シオンは頭に置かれた手に暖かさを感じて、そう思った。
「わかりました。でも頭の撫でるのはやめてください。後、ツキジじゃなくてシオンです。私本当は苗字で呼ばれるの嫌いなんですよ。だってシオンの名前だけが本物だから」
「わかった、なら俺のことも様付けはいらない！　じゃあいくぞ、シオン！」
「はい、ヒデオさん！」
　ヒデオは自信満々な態度で悪魔達へ向かい、走っていく。そしてシオンは、最初に感じていたヒデオの力を感じ取れなかったのが、決してヒデオが弱かったわけだからではない事を知る。

――――《マハブフーラ》
「凄い……！」
　それはまるで嵐だった。現地人ではなす術もなくやられる、ガイア連合製の簡易アナライズにして、十レベル超えの悪魔達を紙細工のよ

うに蹴散らしていく。絵本の中から飛び出てきたかのような、信じられない強さ。これがガイア連合かとシオンは戦慄すら覚えた。
シオンは、トウビョウレベルの何十もの悪魔が襲いかかってきても、一瞬たりとも歩みを止めずに奥へと向かうヒデオに、何とも言えない興奮を覚えていた。それは、大好きな物語の主人公を間近で見たような錯覚、吊り橋効果のようなものだったのかもしれない。しかしもはやシオンのヒデオに抱いた出会った当初のマイナスイメージは全て消えていた。
そして、悪魔達を蹴散らしながら進むこと、一時間。遂にシオン達はそこに到着した。異界の主のいる核の場所へ。

◆◆◆◆◆

『見ていたぞ。あれだけの悪魔を相手によくぞここ迄来れたものだ。まずはその事を褒めておこう、ニンゲンよ』
そこは精霊でもいそうなほど、澄んだ空気を孕んだ場所だった。
中心の陸地を囲うように水が張っていて、その上に蓮の葉が浮かんでいる。中国の仙人がいる秘境にいるのかと勘違いしてしまいそうなほどに、そこは澄んでいた。
故に、その真ん中。陸地にて佇む悪魔の姿が一様に異質に見えた。
全身が赤黒く、ツノの生えた鬼。両手に握っているのは、二本の青龍刀のように刃渡りの大きい刀。だがシオンはそんなことはどうでも良かったら。否、気にする余裕がなかった。全神経を目の前の存在に注視することで頭が一杯だったのだ。
強い。今まで見たどの悪魔よりも、遥かに強い。
この鬼は、おそらく既に小神を超える力を有している。何故なら、シオンは既に、前に三十人ほどで相手取った土地神を遥かに上回る力の奔流を感じているからだ。そんなシオンの様子に触れず、ヒデオは鬼に話しかける。
「邪鬼【ラクシャーサ】。お前が今回の異界の主なのか」
『ほう、俺の名を知っているか！　しかし、そうだといったらどうする

？』
「先ずは先に落ちてきた女の子三人、あとついでに、最初に訪れた霊能者達、あと一緒に落ちてきたむさ苦しい男共は何処だ」
『ああ、それなら、前に来た奴らと男共なら全員食べた。女児はデザートとして、ほれ、ここに入れている』
ラクシャーサが懐からガラス玉を三つ掲げる。その中にはヒトミ、フタバ、ミツコの三人が入っていた。
助けなければいけないのに身体が動かない。シオンはただ己の無力さを感じながら、二人のやり取りを見ていることしかできなかった。
「その子達は生きているのか？」
『死んだら不味くなるのでな。鮮度の為に生かしているに決まっているだろう。解放するには、俺の許可が必要だ。じゃないと勝手に俺のを喰っちまう馬鹿悪魔もいやがる』
「そうか。質問に答えてくれてありがとう。助かったよ」
『いや良い。今の俺は気分がいいからな。本来なら生かして帰さんが、お前の武勇は素晴らしかった。その女を差し出すならここから無傷で現世へと帰してやろう』
「っ!?」
シオンはラクシャーサの言葉を聞き、固まった。それほどにその言葉は魅力的だった。いくらヒデオが強かろうと連戦に次ぐ連戦の後に、これほどの強大な鬼を相手に出来るわけがない。戦えば、ヒデオでさえも死ぬだろう。だが、それをたかだが知り合って一日にも満たない女一人を差し出せば見逃してもらえる。命の対価としては安すぎる。
突然去来した、死への恐怖。シオンの身体はそれを理解して震え上がっていた。そして、頭の上に乗せられた温かい手のひらによって直ぐに震えは止まった。
「素晴らしい申し出は有難いんだけど、それは無理だ。理由は二つある。何故なら、女子供を犠牲にして助かろうと思うほど落ちぶれてはいないから。そしてあと一つは――」

シオンを救ってくれた男は、異界を抜け、野に放たれれば京都どころか国の危機にさえなりうる化け物に、不敵な笑みで吐き捨てた。
「――ーお前をさっさとぶち殺して、異界を抜けた方が早そうだからだ」
『……くっくっく。抜かしたなァ、小童がッ！　いいだろう！　慈悲の一片もなく、肉塊にして喰ってやるわ！』
そして、戦いが始まった。

「シオン！　それを使って、出た情報を教えてくれ！」
「は、はい！」
シオンはヒデオから手渡された小型カメラのようなものをラクシャーサへ向ける。そしてそれに映った情報をヒデオに叫んだ。
「ラクシャーサ、破魔弱点！　呪殺に耐性ありで、レベルは二十五です！」
「サンキュー！　レベル二十五とは中々大物じゃないか」
『今更怖気付いても遅いぞ、童ァ！』
「いや、怖気付いてはいないぜ？　ただ、美味しそうだと思っただけだ。経験値的にな！」
次第にヒートアップしていくそれは、異次元の戦いだった。シオンには目で追うことも出来ない。衝撃音と戦いの余波で崩れていく天井や床。もやは、それは人間の出る幕ではない。化け物と化け物の争い。そんな戦いは、その苛烈さを増しながら、しかし徐々に終わりへと向かっていく。均衡を破ったのは、ヒデオだった。
「これ、魔力消費激しいから、あまり使いたくないんだけどな」
《暴れまくり》＋《トラポート》
『ぬぐォ!?　馬鹿なッ！　グッ！　ゲハァ！』
【トラポート】。それは本来、長距離移動や異界からの退避に使われる空間移動魔法。移動する距離に応じて消費魔力が高まり、逆に短い距離ならば消費も少なくなるこの魔法の使い手は、その全てが世界最高峰の才能を有するガイア連合内においても数が少ない、希少な存在だった。

彼らの知るゲームの中ならば、この魔法は強敵との戦闘を回避するためだけの魔法だった。だが、その魔法をヒデオは短い距離なら消費も少なくなるという点に目を向け、戦闘に活用する道を選んだ。
【魔体】型のステータスで、同格以上の相手にはスピードで負けるヒデオの編み出したその技は、【トラポート】の連続使用と他のスキルを組み合わせる。
とどのつまり、回避不能の多重瞬間移動攻撃である。
ラクシャーサが空中を飛び回る。否、跳ね回っていた。ピンポールのように、何度も何度も血を撒き散らして弾けまわる。
ヒデオに殴られては吹き飛び、吹き飛んだ先に転移したヒデオがまた殴る。繰り返し終わらない強力な連打に、さしもの鬼も苦痛に表情を歪めた。だが、それで終わるほど、ラクシャーサも弱くはなく、反撃を繰り出す。
『糞ガァ！』
《脳天割り》《絶命剣》
掠っただけでも死ぬ。強風を引き起こすほどの威力を持って振るわれるその技は、しかしヒデオには届かない。何故なら、瞬間移動で何処へでも現れるヒデオをラクシャーサが捉えきれないからだ。まるで大人と子供。アリと象を思わせる戦力差。
このままでは負ける。その可能性が頭をよぎったラクシャーサは、戦いの余波から避難していたシオンを見つけ、恥を捨てて突っ込んだ。
『グハハハハ！　お前を人質にすれば奴も動けまい！　動けなくなった奴を俺の絶命剣でなぶり殺してくれるわァ！』
「ひっ！」
猛スピードで近寄ってくるラクシャーサに、シオンは自分のせいで殺されるヒデオとヒトミ達を思い浮かべる。
嫌だ。自分のせいで大切な人が、助けてくれようと手を差し伸べてくれた人が死ぬのは嫌だ。ラクシャーサの手から逃れようとするが、恐怖で動かない身体にシオンはただただ情けなさを感じていた。
これでは、捕まってしまう。かくなる上は此処で自死するしかな

い。己の鎌で首をかっ切ろうとしたシオン。だが、鎌は決して首には食い込まなかった。ラクシャーサが止めたのか。違う。何故なら、ラクシャーサのシオンを掴もうとした手は、止められているからだ。誰に？　それは、鎌が食い込まないように抑え込んでいるヒデオによって。

「ヒデオさんっ」

「ラクシャーサ。お前が切羽詰まったらこう動くことは簡単に予測できたぜ。悪魔ってのはどいつもこいつもやる事が一緒だな」

『クソが！』

「もう終わりだ、ラクシャーサ。これで決める」

『いいのか本当に俺を殺して!?　貴様の女が欲しがっている娘三人は俺の手の中だぞ！　俺を殺せば、娘らは一生玉の中だ！』

ラクシャーサは醜く叫ぶ。その言葉に狼狽えるシオンと違い、ヒデオはトドメを指す為に魔力を集めるのをやめない。確実に殺す気だった。シオンはヒデオを止めようとした。わかっている。それは酷い裏切りである事を。下手をすれば、逆にヒデオが殺されてしまうかもしれない。

しかし、捨て子として誰からも必要とされない。拾われても、便利な駒扱いで愛など知らない。そんな境遇で孤独を抱えていた少女。その子に初めてできた繋がり。それが【ミナシゴ】だった。

根願寺により結成されたのはわずか三年前、三年しか一緒に行動していない。だが、全員が捨て子だった。愛されたかった。繋がりが欲しかったのだ。シオンに、捨てきれない、情の鎖が出来るには三年で十分だった。

諦められない。シオンには、あの三人を諦められるわけがなかった。縋るようにヒデオへ手を伸ばすシオン。ヒデオはその手に左手を重ねて、シオンに聞こえるように呟いた。「任せろ」と。まだ一日にも満たないが、その優しい声色にシオンは心底安心してしまった。

「ラクシャーサ。俺がさっきシオンに簡易アナライズを使わせたのは、お前の弱点や耐性を知る為じゃない。お前がラクシャーサ以外の悪魔が変化していないかを確かめるためのものだった。何故俺がお

前の名前を知っていると、何故玉からの解放方法を聞かなかったと思う？　それは、俺がラクシャーサを何体も葬ってきたからだ。だから知っている。お前らが死に際に、そうやって玉を盾にするのも、そしてお前らを殺しても、呪文さえ知っていれば玉の中の人間は解放されることもな」
『馬鹿なっ！　何故それを、呪文まで知っているというのか!?　嫌だ！　俺はまだ死にたくない！』
「なら、三人を解放してこの異界から出ていけ。また俺のところへ依頼が来るほどの悪さをしない限り、見逃してやる」
『本当か!?』
「お前相手に面倒な嘘を、一々つくと思うか。早く決めろ、殺すぞ？」
『わ、わかった！　これで俺は助かるんだな!?』
　ラクシャーサが呪文を唱えた瞬間。突如玉が光り輝き、ヒトミ達が解放される。シオンは慌てて近づき、三人の脈を確認する。大丈夫、生きていた。それがわかった瞬間、気が抜けたのかシオンは尻餅をついた。ヒデオはそれを見て笑顔を浮かべると、ラクシャーサを向き直った。
「ありがとう。それじゃあもう行っていいぞ。あの世にな」
『そんな！　話が違っ』
《ブフダイン》
「そんな美味しい話があると思うのか。お前みたいな悪魔に」
　悲鳴を上げる暇もなく凍りついたそれを見ることもなく、ヒデオは四人のところへ向かう。
「ヒデオさん！　ありがとうございます！　貴方が居なければ私達は全員今頃……」
「無事でよかったな。これで異界も解決したし、早いところ外へ出よう。とりあえずシオンは三人の意識が戻るまで待てないから、俺特注の【トラポートストーン】で三人を連れて先に帰ってくれ」
「えっ、ちょっと待ってください！　出るならヒデオさんも一緒に」
「ごめん。俺はまだこの異界を出れそうにない。もう一仕事残ってるみたいだ」

「どういう事ですか!?　あっ、光が！　待って、まだ話が――ー」
　トラポートの光で消えていく少女達。ヒデオは、それを見届けて、それから深呼吸をして、先ほどまでラクシャーサが居た場所は視線を向ける。

「ありがとう、見逃してくれて」
「――ーいや、君もあの子達がいたら本気が出せないだろう？　僕としては、本気の君とやりたいからね。このくらいなら全然待つよ。もっとも、君が転移術で異界の外へ逃げるのはさせないけどね？　既に異界を書き換えた。決して中から外へ飛べないようにね」
　そこには男がいた。緑と黒マダラ模様の蛇を肩から巻きつかせている黒服の男は、ゆっくりとヒデオの方へ歩いてゆく。
「さぁ、やろうヒデオ。私は英雄との戦いが大好きなんだ！　なんせ今回は武神として側面が強いからね」
「そうか、俺が英雄に見えるか。目が腐っちまってるぜ、取っ替えたほうがいい」
「いや、君は英雄さ。その若さで練り上げられた強さ、そしてこれから来るであろう終末を知りながら足掻く姿。実に素晴らしい。僕も完全な状態で顕現したかったよ。この不完全な状態じゃ君をちゃんと味わえるか不安でね」
「いやいや、十分ですよ旦那。出来ればもう少し弱い状態で来て欲しかったな、マジで。あ、そうそう、戦う前にあんたへ聞きたい事があるんだが、いいかな？」
「なんだい？　答えれる範囲で――ー」
　――ー《ブフダイン》×５
　五体の氷の龍が黒服の男を飲み込み、周囲を氷結させながら轟音と共に壁を砕き、外へと吹っ飛ばす。
　今出せる最高出力の大技。それを不意打ちで喰らわせた。ヒデオに出せる最高レベルの攻撃。だが、ヒデオの心に勝利の二文字は浮かんでこなかった。あるのは、これでどれだけダメージを与えられたかという不安のみ。冷や汗を拭うことも出来ずに、男を吹っ飛ばした先

を凝視する。
「いいよ。実にいい。技も良かったが、当てるための駆け引きも素晴らしい。人間はそうやって創意工夫をしなければ我々には勝てない。だが、その前に戦いを選択するものもいない。殆どは実力差を感じて逃げてしまうからだ。その点、君はやはり英雄だ！　実力差をわかっていながら、こうして僕に挑んでくるのだから！」
　だが、煙の中から現れた男、否、悪魔は、無傷でそこに立っていた。
「そうそう、名乗るのが遅れたね。私の名は玄天上帝。上帝翁、上帝公などとも呼ばれる存在だ。宜しく頼むよ、退魔士くん？」
「ったく。勘弁してくれよ神様」
　既に逃げ出したくなっているヒデオを嘲笑うように、ガイア連合新発明の【強化簡易アナライズ機】は黒服の男を写していた。
――ー？龍王・ゲンブ？ＬＶ４５

《三人称視点・後編》紫音轟くは、英雄の調べ

「だから、最後の様子がおかしかったと言っているじゃないですか！
もう一度、異界内へ突入させてください！」
ヒトミ達三人を救護班へ任せて、シオンはこの異界攻略の責任者である、根願寺の幹部へ頼み込んでいた。
「駄目だ。本隊が壊滅した上に、異界化が治まっていない。更には、何人か異界の中に入ろうとしたが、内側から結界のようなもので入れなくなっている。これはまだ、異界の主がいるということだ。恐らく、ヒデオ殿は其奴からお前達を逃したのだろう。その行いを無駄にして、ボロボロのお主が戻ったところでどうにもならん。ここは、ヒデオ殿を信じて待つしかないであろう？」
「でも！」
幹部の言っていることは正しい。それはシオンも理解していた。だが、命の恩人が危険だというのにじっとしていられる程、シオンは冷静ではなかった。
「――！何か、困り事かな？」
シオンが声に振り返ると、そこには――！。

◆◆◆◆◆

轟音が鳴り響く。
幻想的であった蓮の葉が漂う湖は、既に凍りつきその影も見えなくなっていた。辺りを囲う美しい木々は、その殆どが凍りつくか、根本から折れている。異界の核を覆う壁はところどころに巨大な穴が点在しており、もはやその機能を失っている。
異界の中心は、既にその限界を保てていなかった。
《ヒートウェイブ》
《マハブフーラ》
「ぐっ！」

「良いぞ、ヒデオ！　もっと踊ってみせてくれ！」
鋼鉄並みの強度を誇る分厚い氷の壁が、不可視の衝撃波によって砕け散る。
相殺しきれなかった衝撃波が、ヒデオの体を軋ませながら、壁へと吹っ飛ばした。
ヒデオがトラポートの瞬間移動や強力な魔法を駆使し、玄天上帝と名乗った男。否、真名、龍王【ゲンブ】と戦い始めてから、まだ一時間も経っていなかった。
「さっきから距離を取って、氷結魔法ばかりだね。それが僕に通用しないのは、もう分かっているんだろう？　早く他の手を使わないと、僕を倒す前に君が死んじゃうよ？」
ゲンブが溜息混じりにヒデオの体を指差す。
ヒデオの体を既にボロボロだった。体中の至る所に血が流れ、内側に残る魔力は、トラポートの連続使用や大魔法の連発により残りわずかになっている。
いくらゲンブの技を魔法で止めようとしても打ち消され、瞬間移動で逃げようにも、少しでも動きが遅れれば凄まじいスピードで近づき、打撃を加えてくる。【ディアラマ】による回復も間に合っていなかった。
「最初の一撃、そして何度か繰り返し当てたブフダイン。それでも、その体に大した傷を負った様子はない。どうやら、呪殺系や物理攻撃の類は耐性がある程度だが、こと氷結に対しては、ただ強いのではなく、無効に近い耐性を持っているみたいだな。俺にとったら最悪の部類に分けられるタイプの敵だ。だが、俺にはまだやっていないことがある」
「ほう、今までは本気じゃなかったということかい？」
「いや、本気ではあった。だが、全力ではない。このままだと何も出来ずに殺されてしまう。それは困るからな。今日は特別に溜め込んでたものを大盤振る舞いだ」
ボロボロだった筈のヒデオの体が治っていく。
それは体だけではなく、微弱な量しか残っていなかった魔力さえ

も、まるで時間が戻っていくかの様に元の魔力量へと増えていった。
どういうことだ。そう、ゲンブが訝しむ。だが、今起きている現象を知る者は、ヒデオ一人だけ。
「持ってきといて良かったぜ。ありがとう、ハセガワさん！」
ヒデオの右手にある腕輪が揺れる。
ヒデオが全回復したこの現象、それを起こしたのは【隠密特化型アガシオン】。ステルス性能だけに特化した、敵に気づかれずアイテムを複数使用できる、ヒデオの使い魔による回復アイテムの使用によるものだった。
【アガシオン】。それは、ガイア連合のシキガミに次ぐ覚醒者の仲間。新しい造魔の一種だった。
普段、一人で異界へ潜ることの多いヒデオの危機管理の拙さに不安を覚えた《ハセガワ　レイ》によって、半ば無理矢理押し付けられたそれは、今、ヒデオの命を助けていた。
「俺の魔法が通じないなら、俺以外のならどうだ」
ヒデオの周りに宝石が浮かぶ。【ストーン】系と呼ばれるそれらは、悪魔を殺すためだけに作られた、様々な属性の魔法を封じ込めた凶悪な魔石だった。
「ぐおおおおお?!?!」
稲妻が、鎌鼬が、邪を滅する聖なる光が、業火が、ゲンブの身体へと降り注ぐ。
今まで、その顔に余裕しか浮かべなかったゲンブが苦悶の声を上げて、彼方へと吹っ飛ぶ。
「見たところ、一番反応がいいのは【アギラオ】ストーンみたいだな。ならもっとくれてやるよ！」
追撃とばかりに、アガシオンを通じてストーンから出る業火をゲンブへとぶち込む。
だが、それで終わるほどゲンブも甘くはない。
「それでこそだ！　ここまで僕に傷を与えるなんてやるじゃないか！」
弱点属性の魔法を喰らいながらも、ゲンブは怯むことなくヒデオへ

と近づく。
《ヒートウェイブ》《牙折り》
《ムドオン》《暴れまくり》
自身へとダメージを無視した、相手を殺すためだけの殴り合いが始まる。
ヒデオは死にかける度、アガシオンからの回復によって無理矢理傷と魔力を癒しながら、ゲンブとの殴り合いを続ける。

殴り合いが始まって、何時間が経過しただろうか。
「ぐふっ。み、見事だ」
限界がきて先に倒れたのは、ゲンブだった。
「……勝った。もう回復アイテムもストーンも残ってない。アガシオンも途中でやられた。本当に危なかったぜ」
これで終わり。そう油断したヒデオは、子供に蹴られた小石の様に、木々を巻き込みながら吹っ飛ばされた。
《デスバウンド》
「がはっ！」
気づけば、ヒデオは壁へめり込むように叩きつけられて、血を流していた。
『……いい。いいぞ。僕、いや我の体を此処まで傷付けたのは貴様で三人目だ。誇るがいい。この四神が一柱、玄武が貴様の力を褒め称えよう。あのままでも良いと侮った詫びだ。見せよう、我の真の姿を！』
そこにいたのは、化け物だった。
成人男性の体の中に収まるとも思えない程の巨躯。龍王【ゲンブ】の真の姿。巨大な亀とそれに巻き付いた赤色の龍が、ヒデオを見下ろしていた。
『これからが本当の戦いだ。貴様の全力、我にもっと見せてみよ。そして輝かせろ、その魂を！』
ゲンブが叫ぶ。
しかし、壁へ叩きつけられ地に伏したヒデオは、ぴくりとも動かず、

倒れたまま起き上がらない。
『……残念だ。実に残念だよヒデオよ。我は期待していた。貴様なら。貴様ならあるいは、武神としての我を満足させてくれると。仕方がない、貴様を殺して、外に出よう。そして手始めに、貴様が先ほど逃した者達を喰らおう。それから、貴様の大切な者達を、家族を、一人ずつ、残虐に、冷酷に、悲鳴をあげさせながら喰い殺そう』
ゲンブは心底悲しそうにそういうと、ヒデオをその巨大な前足で踏み潰そう、一歩前に出した。
ヒデオは戦いに敗れ、これから外へ出たゲンブが京都を破壊し、それを皮切りに終末が始まるのだろう。ヒデオの守ろうとしたものは何一つ守れない。悲劇の様な現実が起ころうとしていた。

『――――兄ィ！　ごめんなさい、私のせいで兄ィが！』
小さな女の子が泣いている。
ヒデオは、何故かその子を泣かせてはいけないと感じ、近寄ろうとする。
女の子の隣で、血だらけの少年が倒れている。
ヒデオは、女の子を泣かせて倒れている少年の姿が、無性に不快だった。
『何故泣かせている。お前はその子を泣かせないために力を求めたんじゃないのか』
場面が変わり、少年の遺影を前に、女の子とその両親が泣いている。
ヒデオはそれを見て、とても心がざわついた。
『やめてくれ。泣かないでくれ。俺は皆を笑顔にするために。幸せな日常を守るために頑張って！』
感情が制御できずに暴れだす。
あの人達を泣かしているのは誰だ。何が悪い。誰のせいだ。
『分かっているだろう？　それはお前を殺そうとして、その次は家族を殺そうとしているやつだ。敵だ。敵対する全ての存在がお前にとっての悪だ』
どうすればいい。どうすれば皆を笑顔にできる？

『簡単だ。起き上がればいい。そうすれば、どうにかなる』

ゲンブの前足が振り下ろされる。しかし、その前足が血に染まることはなかった。

何故なら、ゲンブは踏み潰そうとした前足ごと吹き飛ばされたからである。

「――――誰の家族を喰い殺すだって？」

そこにいたのは、鬼だった。

元々黒かった髪は頭部から流れる血によって赤く染まり、鋭くも澱んでいた瞳には、相手を殺すという殺気に満ちた色が宿っている。その姿は、もはや先程までの人間のそれではない。悪魔。それに近しい禍々しさを纏ったヒデオがそこにいた。

『やはり、ああいえば貴様は起き上がると信じていたぞ、ヒデオ。何故なら、貴様の魂の灯火はまだ消えていなかったからな！　最初にあの胡散臭い黒神父めに呼び出された時は、面倒で仕方がないと思っていたが、貴様に出会えたのだ、召喚されたこともそこまで悪くはなかったな！』

ゲンブが吹き飛ばされた体を起こし、愉快そうに笑う。

「そうか。俺を起こすためにわざわざあんな事言ってくれてありがとよ。お陰で目が覚めたよ」

ヒデオが、先程まで殺し合いとしていたとは思えない軽さで笑う。

「正直、起きたのはいいが俺に残っている力は少ない」

『ならばどうする？　言っておくが、先ほど貴様に言った言葉は嘘ではない。貴様が俺を殺せなければ、俺は外へ出て暴れまわる』

「ああ、分かってる。だから俺も使うさ、奥の手を」

ヒデオがゲンブへと右手を掲げる。それはこれからお前に攻撃を放つというヒデオからのメッセージであった。

「俺はこれを放ったら倒れる。受けてくれるか、俺の全てを？」

『……くくく。グハハハハ！　良いぞ、我は四神が一柱、玄武なれば！　英雄の最後の技を真正面から受け止めない等、ある筈がなかろう！』

ゲンブが四肢を地面へ食い込むほど踏み込む。それがヒデオへの返事だった。
「ありがとう」
それは光だった。魔力を伴う光が、ヒデオへと集まっていく。
何処から湧き出ているのか。それは異界の壁から、木から、凍りついた湖から、地面から溢れ出ていた。
「【チャクラウォーク】って知ってるか？」
【チャクラウォーク】。霊地や異界、更には道端などにもある微弱な魔素を吸収するスキル。しかし、それで回復できる量は本来微々たるものである。何故なら、魔素とは本来、人の思念や悪魔の残骸から発生したものなど様々なものが集まってできた、いわば廃棄物の様なもの。それを人間の体へ、リスクなく魔力へ変化させるには魔素を浄化する過程が必要なのである。
だからこそ、今ヒデオへと可視化するほどの魔素が魔力として集まっていくのは、異常な事であった。
可視化するほどの魔素をそのまま魔力へ変換して体に溜め込むなど、有害な廃棄物をそのまま口に入れるのと同じ事だからだ。
「ふふっ」
ヒデオの口から、夥しいほどの血が溢れ流れる。
それは、無理やり大量の魔力を集めている反動であった。
「異界内でも核に近い、魔素の濃いところじゃないと使えない、燃費の悪い奥の手でね。でも、これで準備は整った」
ヒデオがそう告げると同時に、ヒデオの存在が膨れ上がる。
『これはっ!?』
まるで命を燃やす様に生命力さえも魔力へ変換し、それら全てを右手へと集中させる。
「律儀に待っててくれた礼だ。見せてやるよ。俺の全身全霊、唯一神すら抗えない魔法の極地を！」
ヒデオを中心に、異界が、世界が凍りつく。
『来い、英雄（ヒデオ）よ！　我も、全霊にて答えよう！』
ゲンブが龍と亀、その二体の口へエネルギーを集中させる。

《冥界波》
全てを死へと誘う、冥府の風がヒデオへと向かっていく。しかし、それは届かない。
「【氷河時代(アイスエイジ)】」
ヒデオの放ったそれは、無慈悲な白の極光として、冥府の風すら凍らせて、ゲンブを包み込んだ。

◆◆◆◆◆

「つめてぇな」
徐々に崩壊する異界の中心で、ヒデオはもはや指一本たりとも動かせないと倒れていた。
【氷河時代(アイスエイジ)】。女神転生の原典世界(ゲーム)において、名だたる神や悪魔、唯一神の耐性すら無視しダメージを与える、氷結魔法における極地の一つ。
本来であれば、ヒデオに使える魔法ではないそれを、異界の中心から魔力を奪い、今ある魔力の許容量を遥かに超える魔力量によって無理矢理放つ。
それがヒデオの奥の手であった。
しかし、この技を使った代償は軽くない。
ヒデオの右手は、既に凍りついて氷像の一部と化している。魔力を無理矢理詰めた結果、体もあちこちが悲鳴を上げていて、少しも動く事ができない。このままでは、異界の崩壊に巻き込まれてしまうのは明白であった。
トラポートを使う魔力さえ残っていないヒデオは、どうやって脱出するか頭を捻っていたが、深刻なダメージにより気を失いかけていた。
もう駄目だ、そう思い、意識を失う前に、ヒデオは誰かの声が聞こえた気がした。
「――ーあっ！　ヒデオさん、大丈夫ですか!?　ガイア連合さん、こっ

ちです！」
だが、人間良いことをすれば、自分に返ってくるものである。どうやら、救いの女神はヒデオに微笑んだらしい。
シオンによってお姫様抱っこで担がれたヒデオは、シオンと一緒にやってきたガイア連合の医療班に怒鳴られながら、異界より救出された。
尚、ゲンブにかけられた結界を破り、シオンが異界の核周辺にまで来れたのは、とある陰陽服を着た少年のおかげであることは、ヒデオは知らない

★異界攻略・情報交換スレ　その６４

「ぐおっ!?」
悲鳴と血潮が舞う。
「やべぇぞ、前衛の奴がやられた！」
「負傷者を抱えて皆一旦退けー！」
異界の奥から、巨大な蜘蛛やカボチャ頭の悪魔がわらわらと湧いてくる。
ガイア連合に所属するデビルバスター達。既に覚醒して幾度も悪魔との戦いを経験した、才能溢れる凄腕の退魔士達も多勢に無勢には敵わない。彼等は、負傷者を抱えての異界内からの撤退を余儀なくされていた。
「くそっ！何でこんなに湧いて出てきやがる!?」
時が経つごとに難易度の上がる異界に、強くなる怪異。
それは数多の異界を鎮めてきた歴戦のガイア連合員すら、苦戦を強いられるほどの事態へと進んでいた。
「○○○、後ろだ！」
「えっ？」
そして、今日もまた一人、異界内で悪魔の餌食となった犠牲者がーーー

◆◆◆◆◆

★異界攻略・情報交換スレ　その６４
１２５：名無しの転生者
というわけで、最近の異界、悪魔の発生頻度やばくない？今回の異界攻略は何とか撤退出来たけど、このままじゃ俺みたいに悪魔の集団からバックアタックされてフルボッコにされる奴が増えるばかりだ
１２６：名無しの転生者
＞＞１２５何で生きているんです？

１２７：名無しの転生者
＞＞１２５　成仏してクレメンス
１２８：名無しの転生者
最近どころか、だいぶ前からやばい定期
１２９：名無しの転生者
どう考えても霊地活性化が一向に止まらないせいなんだよなぁ
１３０：名無しの転生者
というかこの異常事態終わりがあるの？明らかにこのまま終末へＧＯ！って感じなんだが
１３１：名無しの転生者
何か海外もやばいらしいからな今。もう日本捨てて逃げることもできないゾ…
１３２：名無しの転生者
ああ、あの他スレで話してたメシア教ＶＳ海外の全退魔組織とかいうやつか
１３３：名無しの転生者
日本の異常な霊地活性化もメシアンが絡んでいるに違いない。俺は詳しいんだ
１３４：名無しの転生者
というか今の日本も、既に割と半終末に近いんじゃないか？家族で飯食ってたら悪魔関係のニュースがテレビで流れてて、お茶吹き出したわ
１３５：名無しの転生者
確かに最近悪魔関連のニュース、本当に多いよな。わかる奴にはもうやばいって思われるレベルで悪魔がはみ出してきてるよな
１３６：名無しの転生者
ニュースといえば、あれどうなったんだ？五重の塔爆破事件とかいうやつ
１３７：名無しの転生者
＞＞１３６　あの海外のテロリストがってやつか。あれやったのってメシア教の奴等じゃねえの？

１３８：名無しの転生者
＞＞１３６　あの事件がニュースで流れてたの見たとき変な笑いが出たわ
１３９：名無しの転生者
未だに犯人見つかってないんだろ？日本の警察もダメダメだな
１４０：＞＞１２５
あれ？あの事件、悪魔関連を隠すためのフェイクニュースって聞いたけど違うの？
１４１：名無しの転生者
あれから一ヶ月は過ぎてるけど、まだ話題になってるくらいだからな。世界遺産ぶっ壊すとか、逆に凄過ぎてやった奴の顔見てみたいわｗｗｗ
１４２：名無しの転生者
＞＞１４０　えっ
１４３：名無しの転生者
＞＞１４０　どういうことだ？
１４４：名無しの転生者
＞＞１４０　ソースはよ
１４５：＞＞１２５
いや、あれって五重の塔が異界化しちゃったから何とか隠密に解決しようとしたら、異界の主とのドンパチで異界内をぶち抜いた余波で天井部分吹き飛んだって話らしいぞ。
ちなソースは、本部勤め医療班の黄色いタイツ。体を治してもらってた時に聞いた
１４６：名無しの転生者
草。情報提供者アイツかよ
１４７：名無しの転生者
＞＞１４５　大丈夫？股間なんともないか？
１４８：名無しの転生者
あの黄色い悪魔、患者が男の時に自身の息子より立派なやつ持ってると、マイナスドライバーやプラスドライバー、最悪よく分からない

もんに改造されるからな
１４９：名無しの転生者
何でアイツが未だに本部で医療班勤められてるのか。あんな危険人物はやくどっかにやった方がいいだろ。四国支部とかに
１５０：名無しの転生者
＞＞１４９　あそこはやめとけ。四国支部長のロリコン侍もあの黄色い悪魔に息子を六角回す変なやつに改造されて、キレて本部までカチコミに来たからな。
あれ以降、黄色いのと天パは合わせちゃいけないって暗黙の了解だろ。また殺し合いが始まるぞ
１５１：＞＞１２５
えっ、俺別に何ともなかったんだけど
１５２：名無しの転生者
＞＞１２５　あっ（察し）
１５３：名無しの転生者
＞＞１２５　大丈夫。男の価値は息子の大きさじゃないからな（嘲笑
１５４：名無しの転生者
＞＞１２５　えっ、あの黄色い悪魔だいぶ小さいから治療されたやつ大体被害に遭ってるのに……
１５５：名無しの転生者
＞＞１２５　生きろ。そなたの息子は慎ましい（爆笑
１５６：＞＞１２５
オレ、オマエラ、ヌッコロス
・
・
・
（この後しばらく、＞＞１２５の息子についてやら黄色い悪魔の所業についての話が行われる）
・

・
・
４０１：名無しの転生者
というかいい加減、話を元に戻そうぜ。
その五重の塔が異界化したやつって今の霊地活性化と何か関係したりしてるの？
４０２：名無しの転生者
俺も気になる。なんだかんだ日本の六大都市で大規模な異界化したの今回が初めてじゃないか？
４０３：名無しの転生者
俺的には、どんな戦いしたら異界の外まで余波が出るのかが分からない
４０４：＞＞１２５
俺もそこまで詳しく聞けた訳じゃないけど、なんか今回の異界化は霊地活性化じゃなくて外部から何者かが手を加えた結果なったものらしい。
で、異界の主についてはよく知らん。なんか強いやつとは聞いたけど。詳しく知りたきゃタイツの所まで行けよ。アイツ大体の時間本部にいるから
４０５：名無しの転生者
外部の者からって、それもう絶対メシアンだろ
４０６：名無しの転生者
＞＞１２５　無能。もっと情報集めてから伝えて、どうぞ
４０７：名無しの転生者
えー、中途半端な情報ばかりでモヤモヤするんだけど。
４０８：★名無しのタイツ
何か＞＞１２５　に呼ばれたから来たけど、五重の塔の件についてだっけ？
４０９：名無しの転生者
クソ野郎きたあああああ！（悲鳴
４１０：名無しの転生者

俺のお稲荷さんはあげませんよ！
４１１：名無しの転生者
うわぁ、出たよ（Ｇを見たときの顔
４１２：★名無しのタイツ
＞＞４０９～＞＞４１１　お前ら、大怪我した時は覚えておけよ
４１３：名無しの転生者
＞＞４０８　タイツニキ！外部の者の話とか、後異界の主、五重の塔の事の顛末教えてクレメンス！
４１４：★名無しのタイツ
外部の者云々は、異界内の残穢からショタオジが発見した痕跡から、霊地活性化による自然発生ではないということしか分かってない。現在調査中だ。
異界の主は、異界の解決に派遣されたガイア連合員の証言と残留魔素の量から推定ＬＶ４０以上４６未満らしい。
で、始まりは、そんなに危険な異界じゃないが、場所が場所だけに素早く解決しないといけないとのことで、日本政府からの催促もあって、ガイア連合内から異界攻略の経験が多く、フットワークの軽いものを二、三人、異界攻略を主導する根願寺に派遣することになった。
ちな、最終的に一人しか捕まらず、そいつ一人を派遣。その結果、その連合員は現在入院中
４１５：名無しの転生者
えっ、ちょっ待っつて!?異界の主ＬＶ４０超えって、いくら俺達でも束になって挽肉にされるクラスだろ!?
４１６：名無しの転生者
ガイア連合内でもスカウター破壊組かショタオジしか対応できなくね？そんな所に派遣されるとか、処刑か何かかな？
４１７：名無しの転生者
そんなのが出たのに京都無事だよな。なんで？（宇宙猫
４１８：★名無しのタイツ
いや、最初はいうてそこまでじゃなかったらしい。異界の主のＬＶも高くても２５いかない位と言われてた

４１９：名無しの転生者
＞＞４１８　当初の予想と最低でもレベル差１５とか流石に草。これが占いだったらガンジーも助走つけて殴るレベルだろ
４２０：名無しの転生者
今北産業
４２１：名無しの転生者
＞＞４２０
①五重の塔爆破事件、あれは悪魔関連事件のフェイクニュースだった。
②五重の塔、異界化したってよ。じゃけん連合員派遣しましょうね～
③騙して悪いが
４２２：名無しの転生者
＞＞４２１　③騙して悪いが、これが本当にクソすぎる。
大体、ＬＶ２５でも俺達の中で終末ガチ勢がまともなＰＴ組んでも安定しないレベルだぞ。
それをＬＶ４０以上の奴相手に一人で戦えとか暗に死ねといわれてるだろ。
４２３：名無しの転生者
というかよく異界の主をやれたな。霊的国防組織（笑）の足手纏い達も一緒だったんだろ？
４２４：名無しの転生者
派遣された奴誰だよ。確実にスカウター破壊組の誰かだとは思うが
４２５：★名無しのタイツ
トラポートの奴っていえばわかるだろ
４２６：名無しの転生者
＞＞４２５　近飯ニキかよ！
４２７：名無しの転生者
突然の異界化にも対応できる凄腕って時点で割と予測できてた
４２８：名無しの転生者

＞＞４２５　まじか。近飯ニキ、病院送りにされたんか。後遺症とか大丈夫なん？
４２９：名無しの転生者
近飯ニキｉｓ誰それ？
４３０：名無しの転生者
このスレにいて近飯ニキ知らないとか流石に草
４３１：名無しの転生者
＞＞４２９　おっ、新参者か？
近飯ニキは異界攻略スレの誰もが世話になった辻ヒーラー様だぞ
４３２：名無しの転生者
＞＞４２９
・中学二年の時、近所にメシア教の教会ができた事をきっかけにガイア連合の存在を知った転生者。通称、近飯ニキ。
・俺達の中でも希少な、空間移動魔法トラポートを使えるというのと近くに危険なのがいる焦りからか、覚醒修行を終えてから日本全国の異界を回る。
・その結果、ガイア連合に所属してから三年程でスカウター破壊組、ＬＶ３０超えの仲間入りを果たす異界攻略ガチ勢。
４３３：名無しの転生者
近飯ニキ、トラポートを使えるから日本全国の異界で目撃情報あるんだよな。俺も一度助けてもらったことあるわ
４３４：名無しの転生者
異界内でのピンチに、颯爽と現れた近飯ニキに辻ディアラマや辻トラポートで救助された奴らは数知れず！
４３５：名無しの転生者
更には、異界の主にＰＴが壊滅させられたりすると何処からともなく現れて、異界の主をボコボコにした後ＰＴ救助してからトラポートで消えるらしいよ！
４３６：名無しの転生者
もはや、ゲームのお助けＮＰＣみたいな感じだよな近飯ニキ
４３７：名無しの転生者

ＬＶ２５クラスの異界の主一人でボコっておきながら、「俺ですか？全然弱いですよ！」とか平気で言い出すからな近飯ニキ
４３８：名無しの転生者
えっ、でも近飯ニキが病院送りにされてるって事は、ＬＶ４０以上の悪魔が出てきたのは本当ってことだろ？
やばくね？これからは異界のボスとしてそのＬＶの悪魔も出てくる可能性があるんだろ？
４３９：名無しの転生者
おい！それって、いわば今いる覚醒者の殆どが相手にもならんってことだろ！
４４０：名無しの転生者
（終末）来たな
４４１：★名無しのタイツ
いや、今回の件は本当に異例中の異例だから同じような事が起きる可能性はほぼ無いらしい。ソースはショタオジ
＞＞４２８　俺含む本部の医療班＋ショタオジが駆けつけたのに後遺症なんて残るわけないだろ（キメ顔
４４２：名無しの転生者
なら安心だな。よしちょっと近くの異界へレベリング行ってくるわ
４４３：名無しの転生者
その後、＞＞４４２　の姿を見た者は誰もいないのであった…
４４４：名無しの転生者
縁起でもなくて草
４４５：名無しの転生者
終末といえば、海外のメシアンもヤバいだろ
４４６：名無しの転生者
今は海外組織同士でやり合ってるけど、いつ矛先がこっちにくるか分からんしな
４４７：名無しの転生者
もうガイア連合産のシェルターに引きこもっておけばいいんじゃ

ないかと最近思ってきたわ

４４８：名無しの転生者
ちょっ、おまいらこれみれ！
【★終末原因特定スレ　ｐａｒｔ４】。メシアンどもやりやがった！
４４９：名無しの転生者
エ、エジプトダイーン!?多神連合さんも終わりですね……
４５０：名無しの転生者
＞＞４４８　本格的にヤバいかもしれん。このところ良いニュースなさすぎだろ
４５１：名無しの転生者
一回、ガイア連合の連合員全員厄払いした方がいいかもしれんな
４５２：★名無しのタイツ
何か上の方でも緊急会議開くみたいだわ。本部内が騒がしくなってきた。俺も忙しくなりそうだから落ちるわ
４５３：名無しの転生者
＞＞４５２　ういーす、情報提供あざす。改造もほどほどにしとけよカス！
４５４：名無しの転生者
お礼と罵倒を同時にこなす。俺達の鏡、人間の屑。
４５５：名無しの転生者
手首モーターすごいっすね
４５６：★名無しのタイツ
なんか廊下の奥でアイツがショタオジに捕まって会議室の方へ無理矢理連れて行かれてて草
４５７：名無しの転生者
＞＞４５６　近飯ニキィィィィィ!!!

転校生は学園ラブコメ鉄板ネタの一つだよねって話

ーーー西にメシア教あれど、極東にガイアありーーー

この世界における最大規模の霊能組織。それが何処であるかなど裏の世界で生きる者なら誰もが知っている。

一神教という世界最大規模の宗教における信者の数をベースとした巨大霊能組織。

一神教メシア派、通称【メシア教】。

アメリカを拠点に、各国家の中枢にまで根を伸ばし勢力を拡大したこの組織は、今や実質的な裏世界の支配者となっていた。

だが、そんなメシア教に対抗できるかもしれない。

他の霊能組織や裏業界人達にそう期待されている組織が極東の島国に存在した。

【ガイア連合】

発足当時、本部一つだけしかなかったその組織は、今や日本の各地に十九もの支部が出来上がる程の勢力拡大を果たしていた。

もはや、日本内における裏の業界でガイア連合の名を知らぬのは、余程のモグリか世間知らずの烙印を受ける程にガイア連合の影響力は強まっていた。

地方では既に、一部ではあるが神や救世主のように扱われ、その支持率は、今でなお、日本政府に唯一存在を認められている【根願寺】すらも上回るくらいほどである。

そんな日本における、現在最もポピュラーで勢いのある組織であるガイア連合。その中枢を担う幹部達が、【ガイア連合山梨支部】。正確にいうのなら、その隣にあるガイア連合のボス、通称【ショタオジ】の管理する【星霊神社】に集まっていた。

会議の間と呼ばれる、連合内でも幹部や支部長クラスの人物しか入れない空間において、陰陽服に身を包む少年を奥にして、左右に統一感のない風貌をしたもの達が連なっていた。

右の席には、傷顔ヤクザや白髪天パ、黒尽くめの狩装束を着る男等

が座り、左の席には、女子高生や番長っぽい服装の男、アルビノの様に白い肌に赤い瞳の優男。更には白饅頭みたいな白くて丸い人等が座っている。

イメージとしては、結界師の十二人会の会議シーンみたいな感じだ。

見た目は変な者が多いが、その一人一人が、中小異界の主程度なら一人で殺せる程の実力者。

並みの悪魔なら部屋に入った時点で消し飛ぶ程の圧力を放つ、ガイア連合の主戦力、力の象徴達が集まる場。

その場にてとある会議が行われていた。

現在、世界中で行われているメシア教の【過激派】と呼ばれる集団が率先して引き起こしている、メシア教の侵略戦争による世界各地の紛争。

それだけではない、今まで日本の中だけと思われていた霊地活性化が、世界的なものであったことによる不安、更には、今まで絶対の支えであった巨大なカルト組織の崩壊ｅｔｃｅｔｃ……。

更には先日の多神連合が一つ、エジプトがメシア教の手に堕ちたという報は裏世界に激震を引き起こした。

正直な話、地方の一組織という規模でしかないガイア連合に、メシア教、並びに世界相手に真正面から戦える力はまだなかった。

故に、ガイア連合の上層部は考えた。今は日本が海外のメシア教【過激派】からの侵略を受けても抵抗をできる様に【地固め】、地盤を強くするべきだと。

その為に、国内の空港等の重要施設に霊的感知結界の施設。

並びに対霊機器や簡易式神の配置等を行い、日本国内の霊的防衛能力を底上げを目指そうということが会議で決まった。

だが、会議で対策が決まったそれらを行うには、あまりにもガイア連合は権力が足りない。いくら地方の救世主として祭り上げられようと、有力な議員と何人か友好な関係を築いているとしても、日本各地の空港などの施設に単独で手を出せる程の影響力はまだ無いのである。

そんなガイア連合に悩みを解決する力を持つ、とある組織が接触した。
ある意味、ガイア連合という名を持つ彼らにとって、原典世界において一番の天敵であるその組織の名は【メシア教日本支部】。
過激派と違い、ラブ＆ａｍｐ；ピースをスローガンに掲げる穏健派の彼らは、日本国内で急激に力を増すガイア連合へ迎合するように協力を申し出た。
かくして、日本政府と真正面から交渉が出来る彼らの協力により、ガイア連合は先ず、地方の結界設置から始めることにしたのだった。

◆◆◆◆◆

不幸というのは少しずつ重なる方がダメージが続く。
例えば、ある日隕石が空から自身の家へ落ちてきても、その時は驚きや家のローンを考えたりして落ち込むだろう。だが、一週間もすれば立ち直る。時間が経てば、吹っ切れて不幸だと思い続けることもないだろう。
しかし、毎日の朝のトイレ。それが毎回トイレットペーパーが無いことに用を足してから気づく。更には、毎日鳥のフンが頭へ降ってきたり、タンスの角に小指をぶつけて悶絶したりする。
こういうタイプの不幸が続くと、とても落ち込む。自分は今不幸なんだと自覚して、何をやってもダメなんじゃないかと考えて、何もかもが上手くいかない。
時間が経てば経つほど、自身に起きる事象を全てマイナス面で捉えて勝手にダメージを負う。
だからこそ、不幸というのは大きなものを一度味わう前者の方がいい。俺は常々そう考えていた。
「あー、神龍でも出てきて願いを叶えてくれないかな」
「兄ィ。変なこと言ってないで、次の店に行くよ。ほらきびきび歩いて」
「ういーす」

俺の事を大好きな百人くらいの美女に囲まれたハーレムで毎日楽しく自堕落に生きていきたい。
何処か楽しそうに先を行くアサちゃんを追いかけながら、右腕のギプスを一目見て、俺はため息をついた。

あの五重の塔以来、俺は日常を平和に過ごしていた。
異界へ行くどころか、学校以外で家を出る時は必ずアサちゃんの監視がつく日常をだけれども。
あの日、異界内で意識不明の重体になった俺はそれから一週間もの間、目覚めることはなかった。
まあ、流石にガイア連合の誇る医療班という所か、目が覚めた俺に後遺症は残っておらず、元気いっぱいの状態で家に帰ったのだが、もんだいはそこからだった。
なんせ一週間も意識不明になるほどの重体になったのだ。
両親や妹にどう言い訳をするのか俺は頭を悩ませたが、そこは国家権力の力を使える根願寺からの仕事。
ダミーニュースにより、俺は全然身に覚えのない事件に巻き込まれて、その時に人質を守る為に犯人から受けた傷が原因で入院しただとかで誤魔化して貰い、何とか違和感のなく家に戻ることができたのだ。
だが、そんな事でいつもの日常に戻れるほど俺の運は良くなかった。
中学の頃からよく怪我をして家族を心配させていた俺だが、流石に今回の件は看過出来なかったらしく、上で述べたとおりに俺は現在、プライベートというものが存在しなくなった。トイレや風呂にまで入ってくるのは、本当にやめてほしい。
家の中では、家族に過保護というほど心配され、俺の聞き手が右手でギプスによって使えない事により、今では、家族でご飯を食べるときに隣の席に座るアサちゃんにあーんをされるという屈辱を味わう事になる。
兄である俺がアサちゃんを甘やかすのは当たり前だが、兄である俺

がアサちゃんに甘やかされるのは解釈違いなのだ。
右腕は退院時に完治しているのだが、ダミーニュースに信憑性を持たせる為ギプスを外すわけにもいかないという、面倒くさい理由により、俺は現在、ため息が溢れでる毎日である。
そんな毎日の中でも特に憂鬱なのが、学校生活であった。
「飯だ飯だ。早く食堂行こうぜ」
「ちょっ、待てよー」
「私、今日はお弁当作ってきたの」
「えっ、ユカそれってダークマターじゃなかったの？」
昼休み。それは、学友と一緒に食事をし、親睦を深めあう時間。人によってはご飯を食べたのち、校庭で学友と覇を競ったり、図書室で読んだり、やることは様々だ。
もっとも、ぼっちの俺には今までトイレでの一人飯をするだけの時間だった。
別に一人が寂しいとかそんな事を思ったことはなかった。異界で過ごす命を削るスリルある空間より、一人で食事をするこの時間の方が俺は好きだったからだ。
だが、そんな日々は俺が退院して学校に戻った時よりなくなった。
「ヒデオ先輩ー♪　今日もお昼ご一緒しませんか？」
この学校の一年を表す赤いバッチを付けた紫髪の美少女が教室の中へ入り、端の方で存在を消していた俺の前へやってきる。
周りの女子生徒の好奇の視線と男子生徒からの強烈な敵意や殺意の視線が俺へと集まっていく。
そんな周りを気にせず、俺へと声をかけた彼女は楽しそうに笑っていた。
ーーー笑うという行為は本来攻撃的なものであり獣が牙をむく行為が原点である。
《ツキジ　シオン》。根願寺に所属する退魔士であり、前回の依頼で共に異界を攻略した彼女は、現在何故か、俺の通う高校へと一年の転校生としてやってきたのだ。
「ほら、ヒデオ先輩もぼーっとしてないで立ってください！　中庭に

日当たりの良い場所を見つけたんです。空気もいいので今日はそこで食べましょう？」
ーーーああ、俺の聖域（トイレ）よ。あの静けさと匂い消しの匂いが忘れられない。戻れるならもう一度あの場所へ。
シオンに引き摺られるように中庭へと連れて行かれながら、俺はそんな事を考えていた。
「んー、美味しい！　やっぱり一人で食べるご飯より二人で食べるご飯ですね、ヒデオ先輩！」
その小さい体の何処にその量が入るのか。
三重に重ねられた重箱に詰められた弁当の中身を次々と口へ運び無くしていくシオン。
その姿を見るだけでお腹いっぱいになるレベルだ。
「あれ、そんなに私を見つめてお箸が全然進んでないですよ、ヒデオ先輩？　もしかして……シオンちゃんに見惚れちゃったのかな？　な、なんちゃって～」
途中で恥ずかしくなったのか、シオンは顔を赤らめて逸らすようにご飯を口に運んでいく。
確かに目の前の少女《ツキジ　シオン》は、美少女といって差し支えないほど綺麗だ。
ぱっちりとした赤い瞳に柔らかそうな桜色の唇。幼げながら綺麗な顔立ちに、胸はなくて背丈は小さいが、そういうのが良いという男には好かれそうな要素が積み重なっている。
そんな美少女と一緒に食事を取れる、それは学校生活における素晴らしい思い出になる事だろう。その相手が普通の美少女ならば、という条件はつくが。
相手は、裏に根願寺が付いている退魔士。つまりは裏を生きる人間である。
そんな相手に、美少女だからと気を許せば何が起こるのか、想像するに値しない。
過去の経験から俺は、仕事、つまりは悪魔に関わる連中に恋愛感情を抱かないようにしている。全ては自身と家族の身を守る為に。

「ヒデオ先輩？　早く食べないと昼休みが終わってしまいますよ。そのミニトマトが苦手で食べれないなら、私が代わりに処理してあげましょうか～？　……まだヒデオ先輩の箸がついてないし、こ、これなら間接キスにならないよね」

何故なら、美少女が俺に積極的に関わってくるなどハニートラップ以外にありえないからだ。

俺は前世を含めて、モテたことがない。そんな俺が、急に美少女と仲良くご飯を食べるなんてイベントにありつける訳がない。それがハニートラップでもない限り、絶対に。

ミニトマトを見つめて、ぶつぶつと何かを呟いているシオンの重箱へミニトマトを摘んで放り投げる。

俺は何があろうとハニトラには屈さない。

それに俺が知る裏関連の人間は、この学校にはまだシオンしかいない。つまりはこの後輩に気をつければ、俺の学校生活はまだまだ安泰ということだ。これからは昼休みに速攻でトイレへ行こう。流石にシオンでも男子トイレにまでは突入してこないだろう。

ガハハ、勝ったな。第三部、完！

◆◆◆◆◆

ーーー翌日

「えーそれでは、これからお前達の新しいクラスメイトとなる転校生の《アリス＝グレイラット》さんだ。彼女は帰国子女でアメリカからやってきた。日本の事についてはあまり知らないそうなので、皆でしっかりとフォローしてあげるように。それじゃあグレイラットさん、自己紹介を」

「ーーーはい」

黒板の前へと金色が動き出す。

美の権化。黄金の輝きを見せる絹のような金髪をした女神のような美少女が黒板の前へと立つ。

クラスは静けさに満たされた。

ある者はその美しさに目をやられて下を向き、またある者は呼吸を忘れた。ある者は両手を組み、このクラスへ在籍していた事を神に感謝し、ある者は無意識にその姿を目に焼き付けんと瞬きをやめた。
「ーーーアリス＝グレイラットと申します。まだ日本の事は良く分かりませんが、皆さんとの対話を通じて少しずつ知っていきたいと思います。これから、宜しくお願いいたします」
優雅で上品に、彼女は頭を下げ、教室の中を静寂が場を支配した。
そして、彼女が顔を上げ、その整った顔に笑みを浮かべた時、まるでワールドクラスで日本が優勝でもしたかのような熱狂がクラスを包んだ。
「グレイラットちゃん、何処に住んでるの？　近いならこの後一緒に帰らない!?」
「彼氏とかいる!?　いないなら俺立候補したいと思います!?」
「馬鹿野郎！　お前らどけよ！　グレイラット様が席へつけねぇだろうが!?」
「ほわぁ～天使～。惚れたわ」
「いや、あんた女でしょ。まあ、でもあの美しさは罪だわ」
「いけるッ！　今年の文化祭ミスコンはウチのクラスの圧勝よ！」
クラスメイト達が騒ぎ立つ。
転校生であるグレイラットの席の周りには、既に人だかりで一杯になっていた。
質問攻めにされて困った顔も美しい。クラスメイト達はとある一人を除き幸福の中にいた。
クラスでもお調子者で通っている、とある男子生徒がグレイラットに質問した。
「ねえねえ、グレイラットちゃんの趣味ってなんなの？」
その質問に少し間を置いて、グレイラットは答えた。
「趣味と言えるのか怪しいですが、私はメシア教教徒として恥ずかしくないように毎日のボランティアに精を出しています」
「俺もボランティアされてぇ～」
「顔立ちだけじゃなくて心も綺麗とか最強じゃない？」

「俺、仏教徒やめてメシア教に入信するわ」
盛り上がり続けるクラスメイト達のボルテージ。俺はそれを教室の端から眺め、冷や汗をだらだらと流し、一人呟いた。
「どうしてこうなった」
いつのまにか、日常が侵食されていっている。俺はただ毎日を清く正しく生きているだけなのに。
いや、原因はわかっている。俺がこんなに頑張っているのに、毎日鳥の糞が俺の自転車の座席の上に降ってくるのも、学校内での男子生徒からの視線が殺意や敵意満載になってきているのも、メシアンの女が学校に転校してきたのも、そう、全ては！
「俺が不幸なのは、どう考えてもメシア教が悪い！」
因みに《アリス＝グレイラット》の現住所は、俺の近所にあるメシア教の教会だった。